

Logistics

第11回

日本災害医療ロジスティクス研修

～ 組織の枠を越えたロジ研修 ～

【開催日程】 2025年9月28日(日)～30日(火)

【開催場所】 岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター 岩手県内沿岸部各地

Logistics

Training course of medical
logistics for disasters

in Iwate Medical University
Center for research and
training on community
health services during disaster



岩手医科大学

災害時地域医療支援教育センター

Center for research and training on community health services during disaster

INDEX

Introduction

| | |
|-----------|---|
| ごあいさつ | 2 |
| 実施要領 | 3 |
| 研修プログラム | 4 |
| 開催告知ポスター | 5 |
| 研修マップ | 6 |
| 研修準備&集合写真 | 7 |

Lecture

| | |
|--------------------|---|
| e-Learning による事前学習 | 8 |
|--------------------|---|

Exercise

| | |
|-----------------------|----|
| 衛星携帯電話・情報通信機器実習 | 12 |
| 広域災害救急医療情報システム (EMIS) | 13 |
| 発電機 | 14 |
| 情報整理記録 | 15 |
| 機器展示見学 | 16 |
| 被災地内におけるロジスティクス活動 | 18 |

Training

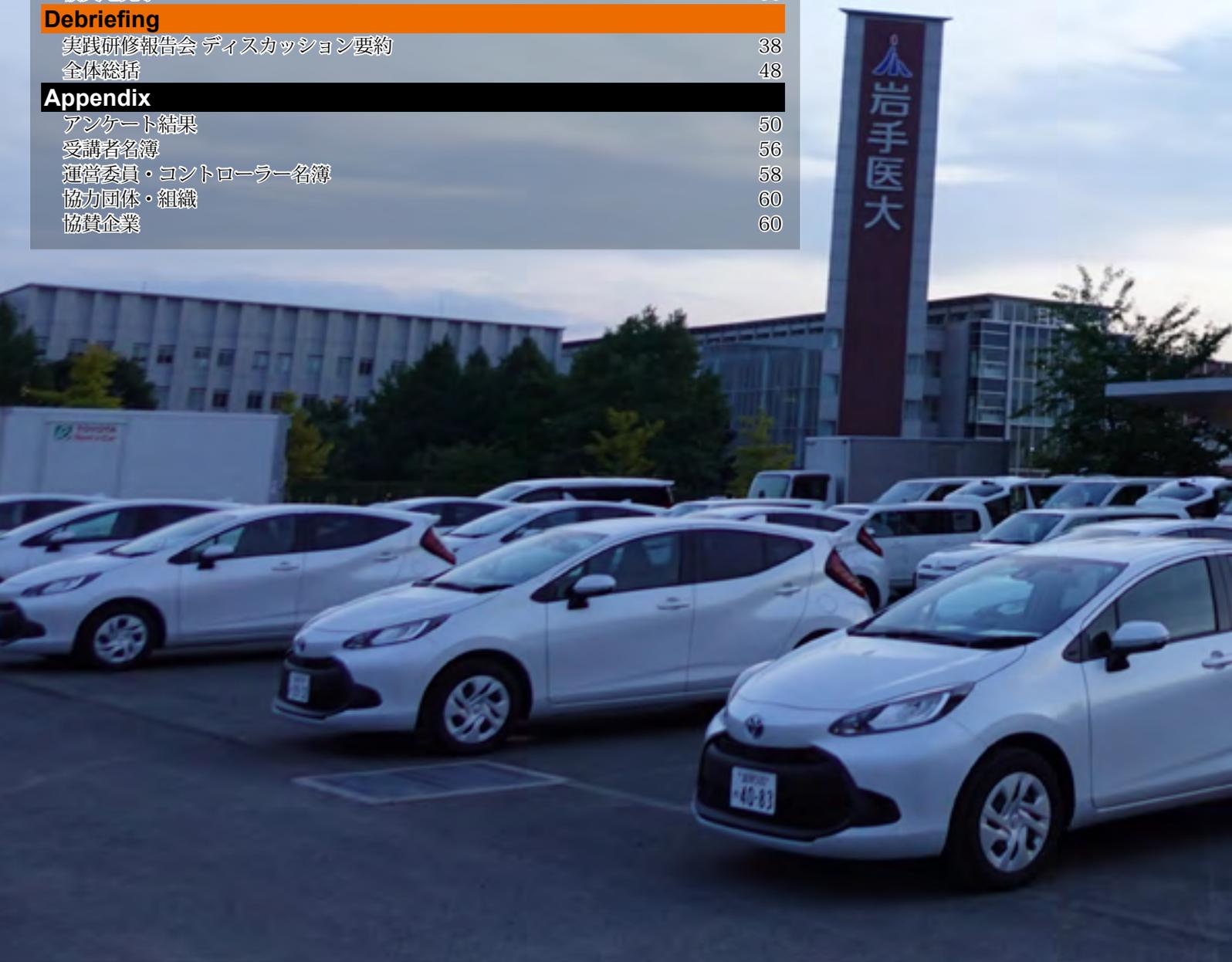
| | |
|-------------------------------|----|
| 実践研修・活動戦略 | 20 |
| GroupA 宮古医療圏 宮古市役所 | 22 |
| GroupB 宮古医療圏 小堀内コミュニティセンター避難所 | 24 |
| GroupC 宮古医療圏 宮古保健所 | 26 |
| GroupD 釜石医療圏 釜石保健所 | 28 |
| GroupE 釜石医療圏 大槌町役場 | 30 |
| GroupF 釜石医療圏 大槌高等学校避難所 | 32 |
| 実践研修調整本部 | 34 |
| 被災地見学 | 35 |

Debriefing

| | |
|--------------------|----|
| 実践研修報告会 ディスカッション要約 | 38 |
| 全体総括 | 48 |

Appendix

| | |
|----------------|----|
| アンケート結果 | 50 |
| 受講者名簿 | 56 |
| 運営委員・コントローラー名簿 | 58 |
| 協力団体・組織 | 60 |
| 協賛企業 | 60 |





ごあいさつ



岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センターの眞瀬です。今回も全国よりお集まりいただきまして、ありがとうございます。本研修は東日本大震災の教訓を基に、災害時の本部機能やロジスティクスの強化などを獲得目標として開催しております。2013年に第1回研修が始まり今回は11回目の開催となります。半年後には東日本大震災から15年という一つの節目を迎えます。先の能登半島地震をはじめ、災害は予想外のタイミングでやってきます。また今後発生が予想される日本海溝・千島海溝周辺地震や南海トラフ地震への備えという意味でも、これまで継続して研修を開催できていることに感謝しております。

参加者の皆様、講師の皆様にもこれだけ集まっていただきました。是非この機会に顔の見える関係を作っただけだったらと思います。実践研修では実際に被災地である沿岸に赴いていただき、現地の皆さん、コントローラーの皆さんとコミュニケーションをとっていただきながら災害対応を経験していただきます。十分に気をつけて、実りある研修にさせていただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

第11回 日本災害医療ロジスティクス研修 研修運営委員長

眞瀬 智彦

実施要領

01. 目的

大規模災害時、被災県に支援に入る医療チームとして円滑な情報のやりとりや十分な生活環境の確保といったロジスティクス能力の向上を目的として本研修を行う。

02. 獲得目標

① ロジスティクスの基本を習得する

- ・派遣目的地までの円滑な到達
- ・衣食住の確保

② 各拠点での本部立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割を理解する

- ・各拠点でのカウンターパートとのコミュニケーション
- ・情報伝達手段の構築および通信訓練
- ・情報の集約と活用

③ 多組織間の連携について理解する

- ・各組織特有の手法などについて理解
- ・多組織間の協働方法の検討

④ 安全管理

- ・リスクへの対策
- ・危険情報の収集
- ・連絡体制の確保

03. 開催日

令和7年9月28日(日)

令和7年9月29日(月)

令和7年9月30日(火)

04. 開催場所

主会場 岩手医科大学(矢巾キャンパス)

災害時地域医療支援教育センター

その他 岩手県内沿岸部

05. 受講対象者

職種は問わない

06. 申込方法

岩手医科大学ホームページより

07. 受講定員

30名(内7名程度岩手県枠)

08. 参加費

研修受講料: 20,000円

(会場までの交通費、宿泊費、弁当代は別途必要)

09. 研修日程

次頁プログラム参照

10. 運営委員

| | | |
|-----|------------------------------|-------|
| 委員長 | 岩手医科大学 | 真瀬 智彦 |
| 委員 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 | 近藤 久禎 |
| | 兵庫県災害医療センター | 中山 伸一 |
| | 山形県健康福祉部 | 森野 一真 |
| | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 | 若井 聡智 |
| | 仙台市立病院 | 山内 聡 |
| | | 高桑 大介 |
| | 社会福祉法人東京有隣会有隣病院 | 楠 孝司 |
| | 青年海外協力協会 | 大友 仁 |
| | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 | 市原 正行 |
| | 神戸学院大学 | 中田 敬司 |
| | 兵庫県災害医療センター | 中田 正明 |
| | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 | 鈴木 教久 |
| | 山形県立こども医療療育センター | 萬年 琢也 |
| | 愛知医科大学 | 小澤 和弘 |
| | 日本赤十字社本社 | 土居 正明 |
| | 日本赤十字社岩手県支部 | 種田 伸吾 |
| | 埼玉県済生会加須病院 | 奥野 史寛 |
| | 岩手医科大学 | 藤原 弘之 |
| | 岩手医科大学 | 富永 綾 |
| | 岩手医科大学 | 金子 拓 |

(敬称略)

11. 主催

岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター

12. 共催

国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT事務局

13. 後援

内閣府

総務省

外務省

文部科学省

厚生労働省

岩手県

日本医師会

岩手県医師会

岩手県教育委員会

日本赤十字社

社会福祉法人恩賜財団済生会

日本災害医学会

日本災害医学会災害医療ロジスティクス検討委員会

日本災害医療ロジスティック協会

災害医療ACT研修所

公益財団法人国際医療技術財団(JIMTEF)

研修プログラム

| 時間 | プログラム | | |
|-------------------------|---------------------|---|--|
| 事前学習【e-Learning】 | | | |
| eラーニング (事前配信) | 20 | ロジスティクス等に関する災害医療の施策 厚生労働省医政局地域医療計画課 赤星 昂己 | |
| | 20 | 災害時の医療と公衆衛生（保健衛生）を支援するロジスティクス 山形県健康福祉部 森野 一真 | |
| | 30 | 医療チームにおけるロジスティクスについて 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 市原 正行 | |
| | 20 | 災害対策本部と災害医療コーディネーターについて 岩手医科大学 眞瀬 智彦 | |
| | 20 | 東日本大震災の医療活動について 仙台市立病院 山内 聡 | |
| | 30 | 近年の災害医療対策対応緊急報告 ～近年の災害対応とDMAT～ 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 近藤 久禎 | |
| | 40 | 近年の災害医療対策対応緊急報告 ～新型コロナ感染症対応の経緯～ 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 近藤 久禎 | |
| | 30 | 近年の災害医療対策対応緊急報告 ～能登半島地震対応について～ 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 近藤 久禎 | |
| | 30 | 安全管理 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局DMAT事務局 若井 聡智 | |
| | 20 | 災害医療チームの診療情報管理 広島大学 久保 達彦 | |
| | 40 | トランシーバー・衛星携帯電話・高速衛星通信・発電機について 岩手医科大学 藤原 弘之 | |
| | 20 | 本部運営と記録・EMIS 岩手医科大学 富永 綾 | |
| | 1日目 9月28日(日) | | |
| 8:30 ~ 9:00 | 30 | 受付 | |
| 9:00 ~ 9:10 | 10 | 開会式 | |
| 9:10 ~ 10:00 | 50 | 衛星携帯電話・情報通信機器実習 福島赤十字病院 三浦 有樹 | |
| 10:00 ~ 11:00 | 60 | 広域災害救急医療情報システム(EMIS) 愛知医科大学 柴田 隼人 | |
| 11:00 ~ 11:10 | 10 | 移動・休憩 | |
| 11:10 ~ 12:00 | 50 | 実習：発電機(25分) 機器展示見学(20分) | 実習：情報整理記録講義 チームのクロノロ(20分) 本部のクロノロ(20分) |
| 12:00 ~ 13:00 | 60 | 昼食 | |
| 13:00 ~ 13:50 | 50 | 実習：情報整理記録講義 チームのクロノロ(20分) 本部のクロノロ(20分) | 実習：発電機(25分) 機器展示見学(20分) |
| 13:50 ~ 14:10 | 20 | 休憩 | |
| 14:10 ~ 16:05 | 115 | 机上シミュレーション「被災地内におけるロジスティクス活動」 兵庫県災害医療センター 中田 正明 | |
| 16:05 ~ 16:15 | 10 | 休憩 | |
| 16:15 ~ 18:20 | 125 | 活動戦略 岩手医科大学 藤原 弘之 | |
| 2日目 9月29日(月) | | | |
| 7:40 ~ 8:00 | 20 | 受付 | |
| 8:00 ~ 終日 | | 実践研修 | |
| 3日目 9月30日(火) | | | |
| ~ 7:00 | | 想定終了 | |
| 7:00 ~ 8:10 | 110 | 片付け(オンライン報告会資料準備等含む) | |
| 8:10 ~ 9:10 | 60 | オンライン報告会 | |
| 9:10 ~ 14:20 | 310 | 撤収・被災地見学・移動 | |
| 14:20 ~ 15:30 | 70 | 討論会 | |
| 15:30 ~ 16:00 | 30 | 閉会式 | |

開催告知ポスター

第11回 日本災害医療ロジスティクス研修
～ 組織の枠を越えたロジ研修～

国内最大規模!!

実践的災害医療ロジ研修

Logistics

Training course of medical
logistics for disasters
in Iwate Medical University
Center for research and
training on community
health services during disaster

- ▶ ロジスティクスの基礎を習得する
- ▶ 各拠点での本部立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割を理解する
- ▶ 多組織間の連携について理解する
- ▶ 安全管理

開催日 | 令和7年9月28日(日)～30日(火)

開催場所 | 《メイン会場》 岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター (矢巾キャンパス)
《その他》 岩手県内各拠点

受講対象者 | 職種不問

受講定員 | 30名

研修受講料 | 20,000円

(会場までの交通費、宿泊費等は自己負担)



【問合せ先】

日本災害医療ロジスティクス研修運営事務局
岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター
〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町医大通1丁目1-1
☎ 019-651-5110 (内線5576)
✉ saigai@j.iwate-med.ac.jp

詳細は下記URLにて公開
<https://www.iwate-med.ac.jp/saigai/training/logistics/>

災害発生時の備前準備の重要性を認識し、危機対応の対応策を
実践・検証する機会を設けています。



岩手医科大学
災害時地域医療支援教育センター
Center for research and training on community health services during disaster



研修マップ

岩手の自治体立医療機関(常設)

- 県立病院(20)
- 県立診療所(6)
- 市町村立病院(8)
- 市町村立診療所(25)

- 盛岡
 - 二戸
 - 一戸
 - 久慈
 - 宮古
 - 釜石
 - 大船渡
 - 気仙
 - 花巻
- 二次医療圏(9)

令和5年4月現在

基幹型臨床研修病院(9)



研修準備 & 集合写真



e-Learning による事前学習

受講者には研修開催前に事前学習として9月2日（火）から9月27日（土）の期間中に講義動画をオンデマンド配信し、必修で閲覧していただきました。本研修を通して受講者の皆様に学んでいただきたいのは、『被災地内におけるロジスティクス活動』であり、その中でも次の4項目を重点項目としています。

- ① **ロジスティクスの基礎を習得する。**
- ② **各拠点での本部立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割を理解する。**
- ③ **多組織間の連携について理解する。**
- ④ **安全管理**

これらを元に、災害医療の基礎からロジスティクス活動の大筋をご理解いただくよう、講義のテーマを選定いたしました。なお、各講義のレジュメをスライド画像のクリックもしくはQRコードより閲覧できるようにしましたので、ご参考ください。

01 ロジスティクス等に関する災害医療の施策

厚生労働省
医政局地域医療計画課 救急・周産期医療等対策室
災害時医師等派遣調査専門官
災害医療支援専門官

赤星 昂己



02 災害時の医療と公衆衛生（保健衛生）を支援するロジスティクス

山形県
健康福祉部
医療統括監

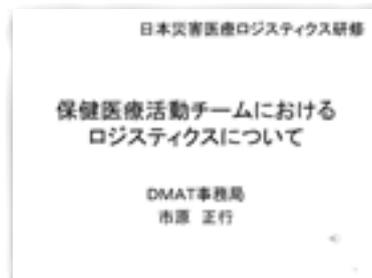
森野 一真



03 医療チームにおけるロジスティクス

国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局
DMAT事務局
災害医療課長

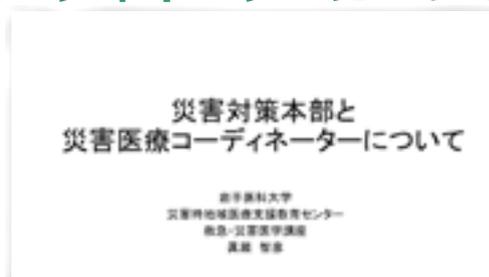
市原 正行



04 災害対策本部と災害医療コーディネーターについて

岩手医科大学
医学部 救急・災害医学講座
教授

眞瀬 智彦



05 東日本大震災の医療活動について

仙台市立病院
救命救急センター
センター長

山内 聡



06 近年の災害医療対応緊急報告 ～近年の災害とDMAT～

国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局
DMAT 事務局
次長

近藤 久禎



07 近年の災害医療対応緊急報告 ～新型コロナウイルス感染症対応の経緯～

国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局
DMAT 事務局
次長

近藤 久禎



08 近年の災害医療対応緊急報告 ～能登半島地震対応について～

国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局
DMAT 事務局
次長

近藤 久禎



09 安全管理

国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局
DMAT 事務局
次長

若井 聡智



10 災害医療チームの診療情報管理

広島大学
大学院医系科学研究科 公衆衛生学

教授

久保 達彦

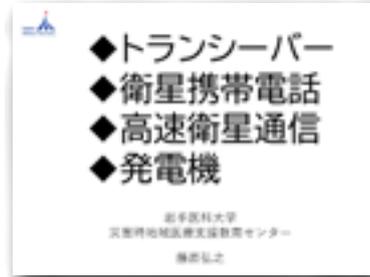


11 トランシーバー・衛星携帯電話・高速衛星通信・発電機について

岩手医科大学
医学部 救急・災害医学講座

助教

藤原 弘之

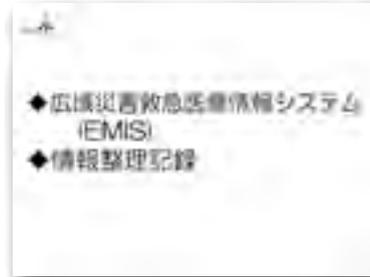


12 本部運営と記録・EMIS

岩手医科大学
医学部 救急・災害医学講座

助教

富永 綾





Exercise

衛星携帯電話・情報通信機器実習



福島赤十字病院

三浦 有樹

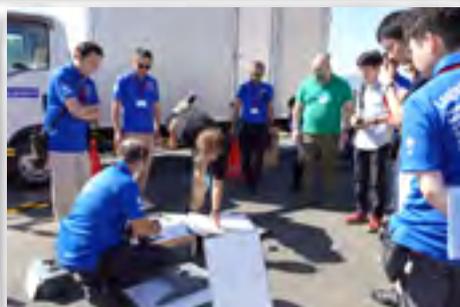


受講者には事前のe-Learningの中で通信機器に関する講義を必修で受講いただいておりますが、実習に先立ち福島赤十字病院の三浦先生より、通信機器の使用方法についてご講義いただき、そのあとで実際に通信機器を操作して音声通信やデータ通信を行いました。

当センター所有の通信機器に加え、総務省東北総合通信局様、ドコモビジネスソリューション様、KDDI様、ソフトバ

ンク様よりお借りした通信機器（実災害時も貸出しをいただいております）、受講者が自施設より持参した通信機器を用いて実習を行いました。

これらの機器は、翌日からの実践研修でも情報収集・発信ツールとして活用するため、受講された皆さんはインストラクターの説明に熱心に耳を傾け、操作方法を習得すべく精力的に実習に参加いただきました。



広域災害救急医療情報システム (EMIS)

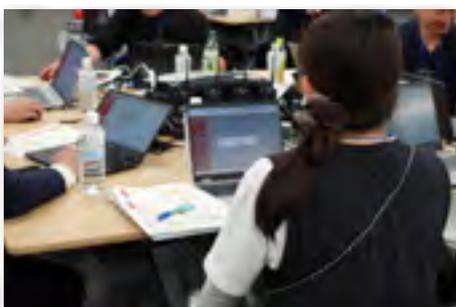


愛知医科大学

柴田 隼人

災害時に医療情報をインターネット上で共有し、被災地内での医療・救護活動を効率的に支援するための広域災害救急医療情報システム (Emergency Medical Information System 以下 EMIS)。阪神・淡路大震災の教訓を活かすために厚生労働省が構築し、2006 年度より運用が開始されたこのシステムは、現在災害発生時に医療・行政・消防等との情報共有を図るために、必須のツールとなりました。

実践研修でも EMIS を使用し、情報を発信・共有するため、受講者は自身の持ち込みのパソコン・タブレット端末等を駆使して、基本操作の習得を行いました。



発電機

被災地では、インフラ（電気、ガス、水道、通信、交通）が損傷を受け、しばらくの間平時のような供給を受けることが出来なくなる場合があります。小電力であれば、近年急速に普及し、手軽に入手できるようになったモバイルバッテリーやポータブル充電器などを活用することも考えられますが、長時間の運用や消費電力が大きい電化製品などを使う必要がある場合は、携行式の発電機を持ち込んで活動することも想定する必要があります。

当センターで所有している3タイプの発電機を使用し、受講者の皆さんに実際に触れて操作していただく実習を行います。

した。

それぞれの発電機について、インストラクターから燃料や使用方法の違い、メリット・デメリットの説明を受けた後、実際に発電機を始動させてみました。鍵を回すとセルが回り、簡単に始動させることが出来るものや、セルを引っ張ってもなかなか始動しないもの、ガソリンではなく携行ガスボンベを燃料とするものなど、その違いや操作の大変さを実体験していただきました。



情報整理記録

災害現場に派遣された際に、いかにして情報を収集し、記録し、分析するかについて、ロールプレイを通して体験していただきました。

これから被災地に派遣されるチームの活動記録を行うという想定で、手持ちのメモ帳に時系列活動記録（クロノロジー）のフォーマットで状況を記録していきます。刻々と会話が進んでいく中、聞き逃さないように情報をメモ帳に書き留めていきます。

次に、本部に到着し、先着のチームから現時点での状況報告を受け、またこれからの指示を受けるシーンという想定で、

情報が記載されたホワイトボードを前に、本部で活動している方から説明を受けます。

報告を受けた内容だけではなく、今後の活動に向けて、こちらから必要な情報を取るために質問をし、それを書き留めていきます。

最後に、本部活動中に記録係を担当することになったという想定で、ホワイトボードに貼り付けられたライティングシートにクロノロジーを記載しました。災害対策本部に飛び交う様々な情報を、漏れることなく書き留めることの難しさを体験していただけたと思います。



機器展示見学

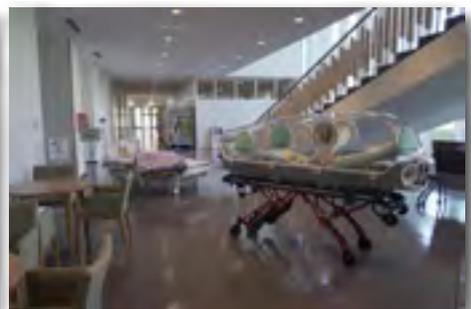
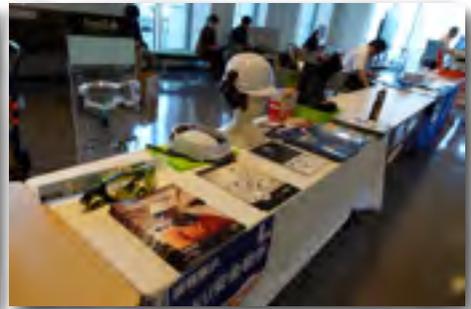
本研修に協賛いただいている団体・企業の皆様にご参加いただき、災害時に有用な資器材の展示ブースをご準備いただき、ご担当の方に製品の紹介・説明をお願いしました。

能登半島地震の医療救護活動時に活用された最新資器材もご準備いただきましたので、現地での使用感、展開状況などの情報もご紹介いただきました。

近年の大規模災害対応事案の増加に対応するように、これらの資器材の開発・改良も日進月歩で進んでおり、技術のトレンドの移り変わりも年々早くなっています。ロジスティシャンとしては、このような資器材に関する情報をタイム

リーに入手し、平時には装備の充実・使用方法の習熟を行い、実災害時にこれらを効率よく活用し、円滑な活動につなげるスキルが必要となります。

今回の機器展示で紹介した資器材の中には、翌日からの実践研修内で実際に使用していただくものもあり、事前研修の段階で、パンフレットや取扱説明書、使用方法を説明した動画を受講者の皆さんに閲覧できるようにしていましたが、実際に現物に触れ、詳細な説明を受けることでより理解を深めていただきました。





被災地内におけるロジスティクス活動



兵庫県災害医療センター

中田 正明

机上にて、自身が所属している医療救護チームが被災地に派遣されるという想定でシミュレーションを行いました。

ここでは、明日から一緒に実践研修を行うグループごとに分かれ、以下の3点を獲得目標として、各課題についてディスカッションをしました。

1. 出動のための準備が行える。
2. 被災地に到達し、効果的な活動について理解できる。
3. 初動医療チームの役割が理解できる。

いざ被災地に派遣されるとなった時に、どのような準備が必要なのか、現地まではどのような手段を使って安全かつ時間通りに到達することができるのかなどについて検討していただきました。

現地到着後の活動について、効果的に活動するために、ロジスティクスの役割としてどのような点について留意すべきなのかについてディスカッションしたのち、過去の事例を紹介いただきながら解説をしていただきました。





Training

実践研修 活動戦略

岩手医科大学

藤原 弘之



研修の趣旨

本研修の目玉ともいえる実践研修。研修の趣旨を説明します。

- ▶ ロジスティクスの基本
- ▶ 各拠点での本部立ち上げと、本部内に置けるロジスティクスの役割
- ▶ 多組織間の連携
- ▶ 安全管理

これらを実践研修の中で習得していただくため、受講者を岩手県内各地に派遣しました。

研修の目的

各拠点に派遣された受講者は、それぞれの拠点で活動する業務調整員として次々に付与される想定にいかにも的確に対応できるか、この実践研修を通して、業務調整員として必要なスキルとは何かを学ぶことを目的としました。各拠点での本部立ち上げや情報のやり取りもさることながら、他の災害医療研修では類を見ない、目的地までの移動やテントを利用したの宿泊、制限が設けられた食事など、リアルな災害想定を体験することで、より実践に沿った経験を積むことができると考えます。

研修の想定

- ▶ 発災 9月26日 14:46 宮城県沖 M8.0 の地震
- ▶ 岩手県内各地 震度 6弱～6強
- ▶ 津波、沿岸は甚大な被害
- ▶ 死者、行方不明者 多数
- ▶ 行政、医療機関も甚大な被害



- みなさんは病院に勤務する調整員です。
(医師、看護師、消防等の方なども、この実践研修での想定は病院勤務の業務調整員です。
実在しませんが、医師・看護師がいる想定)
- 発災3日目にみなさんは医療チームとして被災県である岩手県に派遣されました。
- 航空機で岩手県に入りました。

岩手県に到着したみなさんは、医療チームの拠点である

岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター に到着しました。

- ・センターの本部では、各医療チームの割り振りを検討中。
- ・みなさんは沿岸部を中心に派遣先が割り振られる予定。

活動地域に到着したら、その地域の保健医療福祉の調整本部（取りまとめているところ）に「到着報告」し、「情報収集」が必要になります。

【本部になる可能性のある施設】

- ・病院：災害拠点病院、一般病院
- ・市役所、町役場：現地災害対策本部
- ・保健所

【みなさんの派遣形態】

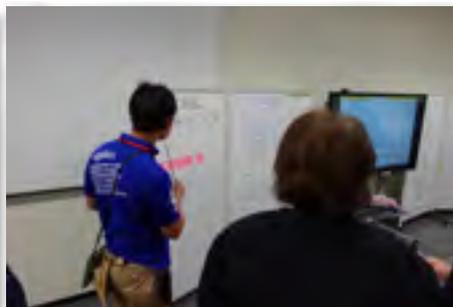
- ・学会コーディネーションサポートチーム
- ・JMATロジチーム
- ・日赤コーディネーター帯同チーム
- ・DMATコーディネーションチーム
- ・知事会救護班

資器材・食料について

実践研修では、派遣先の拠点に持ち込む資器材・食料についてもグループディスカッションし、どのような物がどの程度の量必要なのか、それらをどのような手段で運搬するかなどについても検討しました。

個人装備や生活用品、個人で持ち込んだ通信記録機器（衛星携帯電話やパソコン等）に加え、研修運営事務局側で準備した資機材を各グループで分け合い、持ち出しました。

移動手段としては、レンタカーやタクシーが考えられますが、今回の研修では、研修運営事務局側でレンタカーを選定し、各グループに配車しています。なお、実践研修中の受講者の安全管理のため、各車両にはNTTビジネスソリューションズ（株）様、KDDI（株）様、ソフトバンクテレコム（株）様のご協力のもと、GPS位置情報が取得できるようにしています。これにより実践研修調整本部では研修期間中リアルタイムで各車両の位置情報をモニタリングすることができ、受講者の動向を把握することができます。



Group A 宮古医療圏 宮古市役所



| メンバー | 所属 | 職種 |
|--------|--------------------|--------|
| 鈴木 秀鷹 | 日本赤十字社 武蔵野赤十字病院 | 医師 |
| 高橋 郁弥 | 日本赤十字社 東京都支部 | 事務職 |
| 田村 奈々 | 兵庫県立尼崎総合医療センター | 看護師 |
| 永田 達拓 | 広島大学 大学院医系科学研究所 | 薬剤師 |
| 宮田 ゆき恵 | 山形県立中央病院 | 看護師 |
| 山口 祐介 | 医療法人社団英仁会 愛野ありあけ病院 | 管理栄養士 |
| 吉田 元治 | 大阪府立中河内救命救急センター | 臨床検査技師 |

グループAは宮古医療圏に派遣となった。目的地は宮古保健所である。岩手医科大学からは東方向に直線距離で約70 kmの行程となるが、高速道路は無く北上山地の峠道を通るルートを選択することになる。

到着後、宮古市役所に派遣され本部活動を行うことになるが、ここでのミッションは、宮古保健所と連携しながら、行政とともに宮古市内の被害状況や、避難所情報および関連機関（自衛隊・消防・警察・海保等）の活動状況の把握に努めるとともに、医療機関の被災状況、傷病者の発生状況、ライフライン・医薬品の情報を収集し、宮古市内の医療・保健福祉体制のコントロールを行うことである。

| コントローラー | 所属 | 担当 |
|---------|-------------------------------|-------|
| 小澤 和弘 | 愛知医科大学 | Aグループ |
| 見浦 継一 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT事務局 | Aグループ |
| 金子 泰也 | 長野市民病院 | Aグループ |
| 高橋 貴行 | 永生病院 | Aグループ |
| 大友 仁 | 公益社団法人青年海外協力協会 | 宮古市役所 |

報告会資料

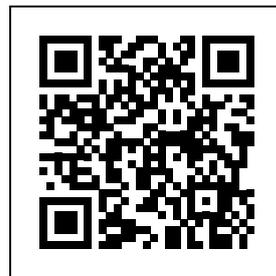
▶ 報告会スライド (PDF)



▶ クロノロジー (PDF)



▶ 報告会動画 (Youtube)



※クロノロジーはレイアウトや表記方法を統一するために一部編集していますが、誤字・脱字等についてはあえてそのままの表記にしています。

コントローラーからのコメント

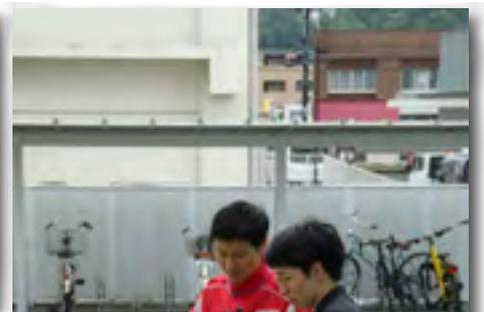
Aグループ（宮古市役所）はDMAT、日赤、JDA—DAT、の多種機関で構成され、各機関の“色の濃い”メンバーが多く、チームとしてまとまるかの不安が当初はあった。

その不安も、リーダーが適材適所の役割分担を行ったことで解消され、サブリーダーを始めとして専門分野に関することはリーダーに助言を行い、それを基にリーダーが方針を決定し、チーム共有するなど、チーム活動の模範となる行動が行われた。

各チーム行動についても、「現状分析と方針決定」などチーム全体が何をすることが理解できていない時など、その

行動に係わる専門家がミニレクチャーを行うなどをしてチーム全体が共通認識する体制が整備されていき、各受講者が各地域に持ち帰り普及していくべき行動でなっと思われる。

カウンターパートであった宮古市役所も最適な環境場所の提供だけでなく、シナリオにない被災経験に基づいた内容をアドリブで呈示されるなど、現実的な実戦訓練になったことに敬意を表する次第です。



Group B 宮古医療圏 小堀内コミュニティセンター



| メンバー | 所属 | 職種 |
|--------|-------------------------|--------|
| 青木 妃奈香 | 日本赤十字社医療センター | 臨床検査技師 |
| 高橋 忍 | 至誠会第二病院 | 管理栄養士 |
| 千葉 隆文 | 医療法人社団東光会 戸田中央総合病院 | 看護師 |
| 奴田原 脩一 | 地方独立行政法人 山口県立こころの医療センター | 作業療法士 |
| 服部 純尚 | 国立病院機構埼玉病院 | 医師 |
| 三上 智子 | 済生会横浜市東部病院 | 看護師 |

グループ B は宮古医療圏に派遣となった。目的地は宮古保健所である。宮古保健所到着後は、グループ A と宮古市役所に派遣。そこからさらに医療圏内の大規模避難所となっていた小堀内コミュニティセンターに派遣となった。

活動拠点が屋外となるため、テントの設営作業等も発生する。

宮古保健所、宮古市役所と連携し、避難所の状況をアセスメント。加えて衛生状況や衛生資材の不足などの確認を定期的に行い、感染症予防や薬品などの不足状況を発信し、調整することが求められる。多岐にわたる避難者からのニーズに、可能な限り答えることも重要なミッションとなる。

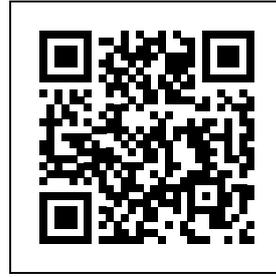
| コントローラー | 所属 | 担当 |
|---------|--------------------------------|------------------|
| 馬渡 博志 | 熊本大学病院 | Bグループ |
| 羽田 達矢 | 独立行政法人国際協力機構 (JICA) | Bグループ |
| 橋 岳志 | 大阪府済生会千里病院 | Bグループ |
| 大山 凌治 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | Bグループ |
| 林 洋克 | 済生会宇都宮病院 | 小堀内コミュニティセンター避難所 |
| 増留 流輝 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 小堀内コミュニティセンター避難所 |

報告会資料

▶ 報告会スライド (PDF)

▶ クロノロジー (PDF)

▶ 報告会動画 (Youtube)

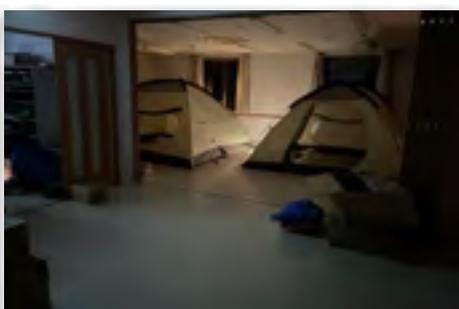
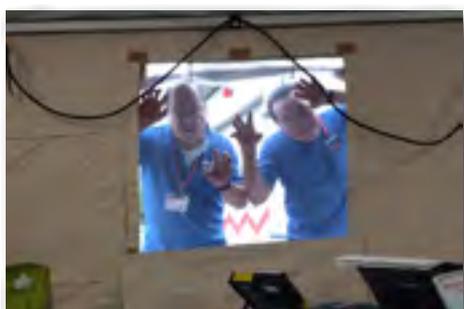


※クロノロジーはレイアウトや表記方法を統一するために一部編集していますが、誤字・脱字等についてはあえてそのままの表記にしています。

コントローラーからのコメント

B グループ (小堀内コミュニティセンター避難所) は避難所支援ということもあり、最初は情報収集に苦心していたが、リーダーとサブリーダーの的確な指示により、徐々に状況をつかみ、その情報を共有することができた。はじめはただどのように情報をとり、その情報をどうすればよいか迷っていたが、ミーティングを重ね、現状分析を行うにつれ、何が必要であるか、足りない物資はどのように確保すればよいか、情報管理と資源管理が時間がたつにつれ行えるようになった。チームのメンバー 1 人 1 人が個性があり、その個性を十分に活かせる活動となった。リー

ダーが決断を行い、サブリーダーがそのサポートを行うことができた。他のメンバーも協力しながらの活動ができた。夜は森の中ということもあり、野生動物の遠吠えも聞こえ少々不安であったが無事に夜明けを迎え、活動終了となった。道中の安全管理 (道路状況、コンボイ走行) もきちんと行え、また連絡、報告、相談がうまくかみ合ったチームであった。



Group C 宮古医療圏 宮古保健所



| メンバー | 所属 | 職種 |
|--------|--------------------------------|-------|
| 金井 滉己 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 救急救命士 |
| 近藤 徹 | 長崎県五島振興局（五島保健所） | 医師 |
| 高橋 大作 | 杏林大学医学部付属杉並病院 | 看護師 |
| 原 郁美 | 医療法人社団武蔵会 TMG あさか医療センター | 看護師 |
| 松崎 佳小里 | 一般社団法人太田綜合病院附属太田西ノ内病院 | 看護師 |
| 山本 謙治 | 社会福祉法人鎌倉市社会福祉協議会 | 事務職 |

グループCは宮古医療圏に派遣となった。目的地は宮古保健所である。岩手医科大学からは東方向に直線距離で約70 kmの行程となるが、高速道路は無く北上山地の峠道を通るルートを選択することになる。到着後は、引き続き宮古保健所での本部活動を行うこととなった。

宮古保健所のミッションは、宮古市周辺市町村の被害状況や、避難所情報および関連機関（自衛隊・消防・警察・海保等）の活動状況の把握に努めるとともに、医療機関の被災状況、傷病者の発生状況、ライフライン・医薬品の情報を収集し、宮古医療圏全体のコントロールを行うことである。

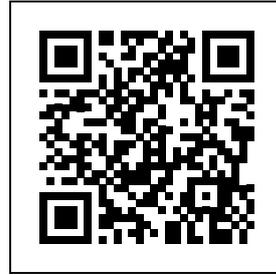
| コントローラー | 所属 | 担当 |
|---------|--------------------------------|-------|
| 寺澤 ゆかり | 京都第一赤十字病院 | Cグループ |
| 大塚 修宏 | 流山市消防本部 | Cグループ |
| 佐久間 惟代 | 福島赤十字病院 | Cグループ |
| 木村 磨功 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | Cグループ |
| 奥野 史寛 | 埼玉県済生会加須病院 | 宮古保健所 |

報告会資料

▶ [報告会スライド \(PDF\)](#)

▶ [クロノロジー \(PDF\)](#)

▶ [報告会動画 \(Youtube\)](#)



※クロノロジーはレイアウトや表記方法を統一するために一部編集していますが、誤字・脱字等についてはあえてそのままの表記にしています。

コントローラーからのコメント

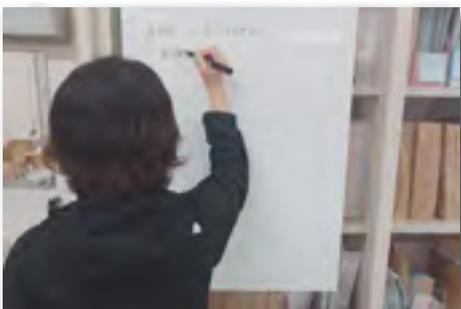
C班は全体を通して、静かで大人しいチームであったが、リーダー中心にミーティングを行い、終始、穏やかな雰囲気での活動ができていた。

宮古への移動中、無線や移動ルートでトラブルが発生したが、休憩場所でのミーティングで、適宜、修正を行い対処していた。宮古保健所で本部活動を行ったが、コントローラーからの声かけもあったが、役割分担に沿った活動に従事し、適宜、役割を越えて活動を行いチームワークの良さが感じられた。衛星設置には向いていない立地の為、通信確立まで時間を要したが、諦

めず対処できており、不明な点はコントローラーに質問して、積極的に問題解決に取り組んでいた。

保健医療福祉調整会議の流れがイメージしにくく戸惑っているようであったが、多機関連携の重要性は感じてもらうことが出来たと思う。

それぞれが、研修での学びを積極的に実践で生かそうと努力する面が見られたのが印象的であり、今後も研修・訓練等への継続な参加で災害時の大きな力になることを期待する。



Group D 釜石医療圏 釜石保健所



| メンバー | 所属 | 職種 |
|--------|--------------------------|--------|
| 飯塚 建斗 | 日本赤十字社 | 事務職 |
| 大北 真哉 | 四国こどもとおとなの医療センター | 医師 |
| 小賀坂 奈美 | 一般財団法人脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 | 看護師 |
| 佐藤 航 | 地方独立行政法人 新小山市市民病院 | 臨床工学技士 |
| 澤舘 史晃 | 岩手医科大学附属病院 | 看護師 |
| 西本 章吾 | 社会福祉法人恩賜財団済生会 本部事務局 | 事務職 |
| 三神 憲一 | 学校法人青山学院 青山学院大学 | 教員 |

グループDは釜石医療圏に派遣となった。目的地は釜石保健所である。岩手医科大学からは南東方向に約90kmの行程となるが、高速道路が一部使用できないため、北上山地の峠道を通り遠野市を経由したルートとなる。到着後は、引き続き釜石保健所での本部活動を行うこととなった。

釜石保健所のミッションは、釜石市周辺市町村の被害状況や、避難所情報および関連機関（自衛隊・消防・警察・海保等）の活動状況の把握に努めるとともに、医療機関の被災状況、傷病者の発生状況、ライフライン・医薬品の情報を収集し、宮古医療圏全体のコントロールを行うことである。

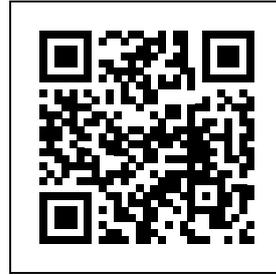
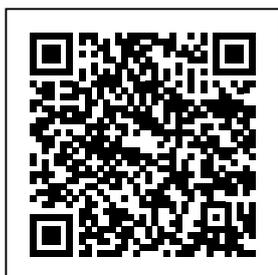
| コントローラー | 所属 | 担当 |
|---------|--------------------|-------|
| 菊田 智子 | 独立行政法人国際協力機構（JICA） | Dグループ |
| 久保 芳宏 | 日本赤十字社福島県支部 | Dグループ |
| 篠原 功 | 山口県立こころの医療センター | Dグループ |
| 高桑 大介 | | 釜石保健所 |

報告会資料

▶ [報告会スライド \(PDF\)](#)

▶ [クロノロジー \(PDF\)](#)

▶ [報告会動画 \(Youtube\)](#)

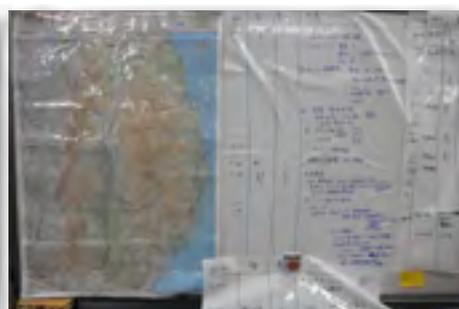
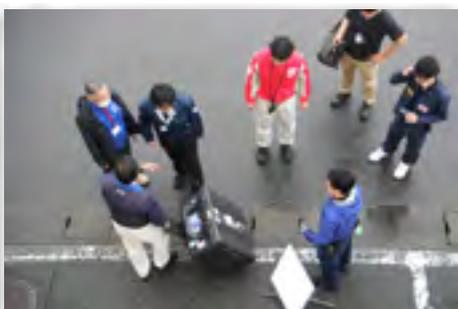


※クロノロジーはレイアウトや表記方法を統一するために一部編集していますが、誤字・脱字等についてはあえてそのままの表記にしています。

コントローラーからのコメント

釜石保健所チームは、保健所および各拠点から寄せられる課題に対し、自らのリソースと地域の状況を的確に分析・評価し、現実的かつ実行可能な対応策を導き出す力を示した。メンバー間の協働意識が高く、情報共有が円滑で、相互に補い合いながら行動できていた点が印象的である。リーダーに業務が集中する局面も見られたが、その課題を共有し、改善に向けて主体的に動く姿勢が確認された。通信環境が不安定な場面では、メール等を併用して情報を補完し、的確な判断と伝達を維持していた。特に、活動地域に入る前に地域情報を整理し、活動を想

定するという準備を行っていた点は、これまで担当したグループにはあまり見られなかった取り組みであり、特に印象深かった。このような主体的な準備によって、現地活動がより円滑かつ効果的に進められていたように感じた。安全管理への意識も終始高く、状況に応じた柔軟性と安定感を併せ持つチームであり、総じてバランスの取れた活動が展開されていたと評価する。



Group E 釜石医療圏 大槌町役場



| メンバー | 所属 | 職種 |
|--------|-----------------|--------|
| 佐々木 啓介 | 日本赤十字社 | 事務職 |
| 藤田 楓 | 芝浦工科大学 | 大学院生 |
| 堀江 斗士輝 | 東名厚木病院 | 看護師 |
| 松森 拓也 | 盛岡市立病院 | 看護師 |
| 三上 昌章 | 千葉県総合救急災害医療センター | 臨床検査技師 |
| 吉田 伊織 | やよいがおか鹿毛病院 | 理学療法士 |

グループEは釜石医療圏に派遣となった。目的地は釜石保健所である。釜石保健所到着後は、グループCと大槌町役場に派遣となり、引き続き大槌町役場で活動することとなった。

大槌町役場でのミッションは、釜石保健所と連携しながら、行政とともに大槌町の被害状況や、大槌高校避難所を含む町内の避難所情報および関連機関（自衛隊・消防・警察・海保等）の活動状況の把握に努めるとともに、医療機関の被災状況、傷病者の発生状況、ライフライン・医薬品の情報を収集し、大槌町内の医療・保健福祉体制のコントロールを行うことである。

| コントローラー | 所属 | 担当 |
|---------|--------------------------|-------|
| 濱田 真里 | 兵庫県栄養士会 | Eグループ |
| 腹子 歩夢 | 一般財団法人脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 | Eグループ |
| 下山 京一郎 | 医療法人社団武蔵会 TMG あさか医療センター | Eグループ |
| 青木 正志 | 茨城県立中央病院 | 大槌町役場 |

報告会資料

▶ [報告会スライド \(PDF\)](#)



▶ [クロノロジー \(PDF\)](#)



▶ [報告会動画 \(Youtube\)](#)



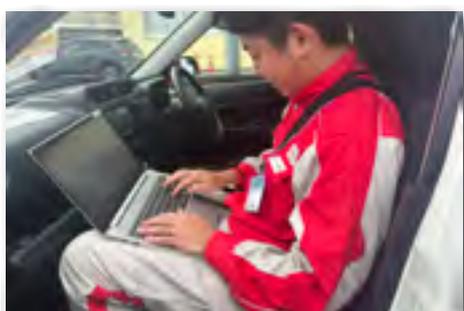
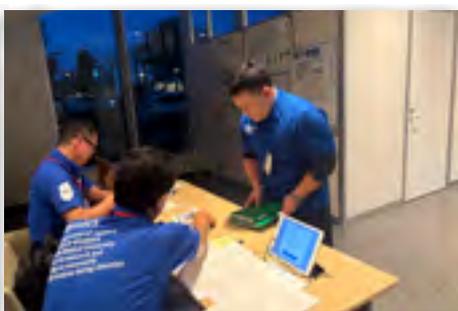
※クロノロジーはレイアウトや表記方法を統一するために一部編集していますが、誤字・脱字等についてはあえてそのままの表記にしています。

コントローラーからのコメント

災害派遣の経験者が少なかったため、少々不安を感じる場面がありましたが、その分伸びしろたっぷりのチームでした。リーダーを中心に小まめにミーティングを行いながら情報共有と都度役割分担を考えるチームワークが印象的でした。とはいえ、リーダーが自ら動くチーム全体が回らない、という状況に陥った場面もあり、リーダーに考える時間を与えるにはどのような役割分担にするべきか、ということを考える機会になったのではと思います。

優先順位のつけ方、役割分担、情報整理や通信環境を安定

させる難しさなど、メンバーそれぞれが実践訓練ならではの課題を感じながらも、各自が専門性を活かしつつも役割として与えられた業務に確実に対応し、クオリティの高い取り組みができていました。得意分野を担当することはもちろん良いことですが、研修の場なので、これまでやったことのない業務にチャレンジする姿勢があると、より学びが広がったのではと思います。



Group F 釜石医療圏 大槌高等学校



| メンバー | 所属 | 職種 |
|-------|----------------|-------|
| 大橋 寛司 | 神戸市西区役所玉津支所 | 行政職員 |
| 菊地 駿 | 東京都立多摩総合医療センター | 救急救命士 |
| 小出 香織 | 栃内病院 | 看護師 |
| 坂本 貴弘 | 日本赤十字社茨城県支部 | 事務職 |
| 佐藤 陽介 | 東京医科大学病院 | 看護師 |
| 澤田 悠輔 | 群馬大学医学部附属病院 | 医師 |
| 中村 匡秀 | 済生会松山病院 | 作業療法士 |

グループFは釜石医療圏に派遣となった。目的地は釜石保健所である。釜石保健所到着後は、グループEと大槌町役場に派遣となり、そこからさらに医療圏内の大規模避難所となっていた岩手県立大槌高等学校に派遣となった。

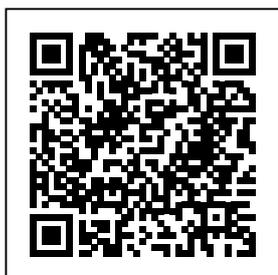
活動拠点が屋外となるため、テントの設営作業等も発生する。

釜石保健所、大槌町役場と連携し、避難所の状況をアセスメント。加えて衛生状況や衛生資材の不足などの確認を定期的に行い、感染症予防や薬品などの不足状況を発信し、調整することが求められる。多岐にわたる避難者からのニーズに、可能な限り答えることも重要なミッションとなる。

| コントローラー | 所属 | 担当 |
|---------|-----------------|-------|
| 伊崎田 和歌 | 千葉県総合救急災害医療センター | Fグループ |
| 田之畑 李菜 | 宮崎大学医学部附属病院 | Fグループ |
| 藤井 貴文 | 北見赤十字病院 | Fグループ |
| 渡邊 暁洋 | 兵庫医科大学 | 大槌高校 |
| 三浦 有樹 | 福島赤十字病院 | 大槌高校 |

報告会資料

▶ 報告会スライド (PDF)



▶ クロノロジー (PDF)



▶ 報告会動画 (Youtube)

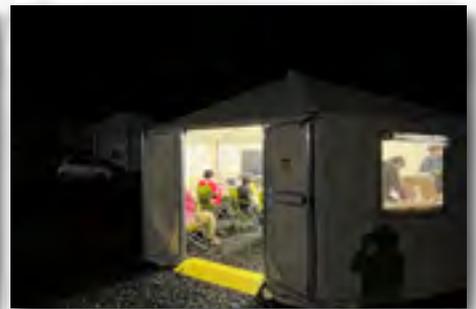


※クロノロジーはレイアウトや表記方法を統一するために一部編集していますが、誤字・脱字等についてはあえてそのままの表記にしています。

コントローラーからのコメント

全体を統括するリーダー、環境リーダーを兼ねたサブリーダーを中心に、「活動・拠点場所の立ち上げ」と「避難所支援体制の整備」を両面から進めることができた。全容が見えないなかで相当数の避難者とライフライン途絶という危機的状況、どこから着手し、どう繋げるかを模索しながらも、学校関係者や町役場と連携し支援体制を構築し始めた点は大きな成果である。メンバーは自分の役割を理解し、得意分野を活かしながら基盤を整え、時間の経過とともにチームワークが強化されていく様子が印象的であった。一方で、「精度を求める上位本部」と「情報

やりソース不足で危機的な現場」との間での支援調整の難しさにも直面した。初動期にしばしば生じる課題であるが、目の前の状況を適切に評価し、今後の方針を明確に示すことは現場のみならず上位本部への有効なメッセージともなり得る。現場で捉えた「状況」と「方針」を適切に共有し、より効果的な支援へと繋げていくことを期待したい。



実践研修調整本部



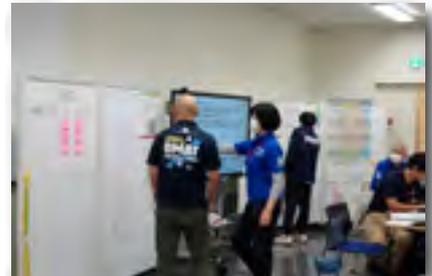
| コントローラー | 所属 | 担当 |
|---------|--------------------------------|------|
| 眞瀬 智彦 | 岩手医科大学 | 調整本部 |
| 近藤 久禎 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 調整本部 |
| 市原 正行 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 調整本部 |
| 田代 雅実 | 福島県立医科大学 | 調整本部 |
| 倉橋 公恵 | 日本福祉大学 | 調整本部 |
| 藤原 弘之 | 岩手医科大学 | 調整本部 |
| 富永 綾 | 岩手医科大学 | 調整本部 |
| 金子 拓 | 岩手医科大学 | 調整本部 |

各拠点のコントローラーと連携し、実践研修が安全かつ円滑に進行するよう、全体の運営・調整を行う。

岩手医大参集本部、岩手県災害対策本部支援医療室（岩手県保健医療調整本部）として、またその他の仮想相手役（岩手県庁、消防、警察等）として受講者への情報提供や調整作業を行う役割を担った。

各車両に搭載された GPS 位置情報等を活用しながら、受講者の行動を逐一把握し、研修の進行状況をマネージメント。研修全体に関わるイベント（道路交通情報の提示や余震発生などの通知）や、医療圏・グループ間の調整等を行い、想定シナリオが円滑に進行するようにバックアップを行った。

▶ クロノロジー (PDF)

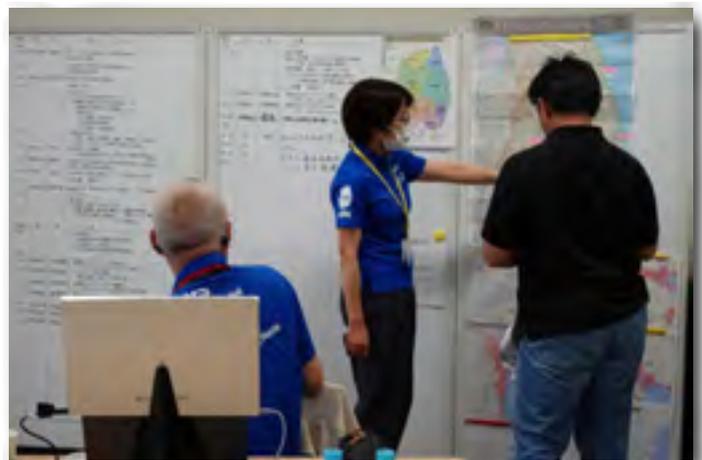


今回の訓練では、GPS による移動経路のモニタリングを通じて、各チームが想定されたシナリオに沿って円滑に進行していることが確認されました。拠点到着後、チームは速やかに参集拠点本部へ到着を報告しました。

現地で活動するチームは、自治体での対応が難しいと判断した上で、トイレ、毛布、食料といった物資支援を県災害対策本部に要請しました。これらの要望は根拠に基づいた適切な数量であり、各拠点で十分に吟味されたものと推察されます。

衛星電話でのやり取りの際、一時的に情報が錯綜する場面がありましたが、Web 会議を緊急に設定することで、問題を解決することができました。これは Starlink による通信の確立が、混乱を速やかに収束させる上で大きな役割を果たしたと考えられます。

また、例年課題となる車両、燃料、人員に関する要望が今年は一切ありませんでした。これは、現地でどのような議論があったのか本部としては気になった点です。



被災地見学

被災地巡りツアー in 宮古医療圏
宮古保健所 & 宮古市役所



宮古保健所
宮古市役所
研修会場 出発

岩手県立宮古病院
 東日本大震災時の医療対応に関する講話
 ▶ 吉田 健 医師 (災害医療科長)
 ▶ 塩原 伸明 臨床工学技師長 (日本DMAT隊員 家庭医療科員)
 「被災地を生きかす」

うみどり公園
 うみどり公園 資料

昼食

被災地巡りツアー in 宮古医療圏
小堀内コミュニティセンター



小堀内 コミュニティセンター
研修会場 出発

道の駅たろう
 東日本大震災時の医療対応に関する講話
 特定非営利活動法人 津波太郎
 大坊 秀一 理事長

宮古市 災害資料伝承館

昼食
 (おすすめは...) ドンコ井



釜石

被災地巡りツアー in 釜石医療圏

釜石保健所



釜石保健所



研修会場
出発

うのすまい・トモス



東日本大震災時の医療対応に関する講話
独立行政法人国立病院機構釜石病院
土肥 守 名誉院長



うのすまい・トモス



語り部 かわぐち さん



うのすまい・トモス

昼食






釜石

被災地巡りツアー in 釜石医療圏

大槌町役場 & 大槌高校



大槌町役場
大槌高校



大槌高校までの1.5km



研修会場
出発

大槌町役場



東日本大震災時の医療対応に関する講話
岩手県立大槌高等学校
伊藤 晃 副校長
大槌町 防災対策課
小笠原 祐樹 課長補佐
佐々木 申市 様



鎮魂の森 あえーる




鎮魂の森 あえーる

昼食






Debriefing

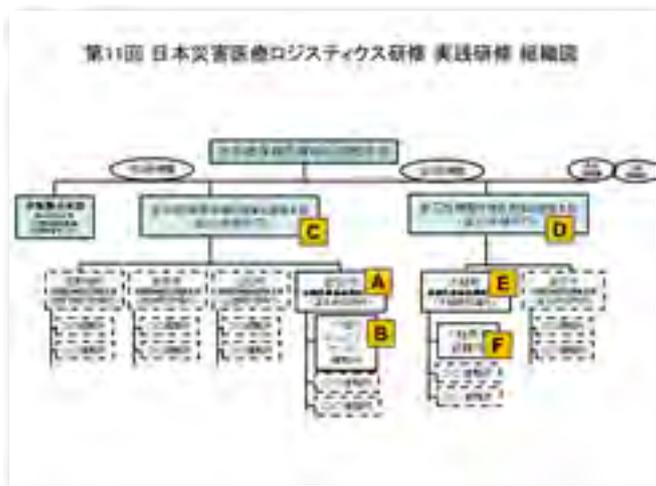
実践研修報告会ディスカッション要約

藤原：それでは皆さん揃いましたので、今から実践研修の討論会を始めたいと思います。改めまして研修実施会場である東日本大震災・津波の被災地への派遣、そして無事の帰還。お疲れ様でした。細かな課題やトラブルについて伺っておりますけども、研修運営上の大きなトラブルは無かったと聞いておりますので、主催者側としては安堵しております。心地良い疲れと充実感に満たされていると思いますが、最後に1時間程度、報告会の内容を踏まえた討論会という形で締めたいと思います。

討論会の段取りを説明させていただきます。各グループから1名ずつパネラーとしてご登壇いただきますが、その方だけではなくグループ内の皆さんにも随時ご参加・ご発言いただきながら議論を深めていただく。その様なやり方で進めていきたいと思っております。

それでは、早速ですが今回の研修の指揮系統図としてはこのような体制で実施しました。参集拠点である岩手医科大学災害時地域医療支援教育センターを出るまでは、どこの医療圏のどこの保健所に行く…という所までは決まっていたのですけれど、そこから先の派遣場所は未定という中で、それぞれがその状況に合わせて展開していったという形でございまして、細かく説明は申し上げませんが、獲得目標に沿ってというのを意識して研修を進めていただいたという形になります。

ここからは討論会をテーマに沿って進めて参りたいと思っております。



討論会の司会を運営委員長の眞瀬先生、同じく委員の近藤先生、それから本部のプレーヤーを担当した柴田さんをお願いしております。ここからは眞瀬先生に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

眞瀬：岩手医大の眞瀬です。お疲れ様でした。時間があまりないのですが、実践研修のディスカッションを始めさせていただきます。獲得目標として項目が1、2、3、4とありますが、CSCAに沿って少し順番を変えていきたいと思っております。C【コマンド&コントロール】獲得目標の、項目2『各拠点での本部

獲得目標

1. ロジスティクスの基礎を習得する
 - ・ 派遣目的地までの円滑な到達
 - ・ 衣食住の確保
2. 各拠点での本部立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割を理解する
 - ・ 各拠点でのカウンターパートとのコミュニケーション
 - ・ 情報伝達手段の構築および通信訓練
 - ・ 情報の集約と活用
3. 多組織間の連携について理解する
 - ・ 各組織特有の手法などについて理解
 - ・ 多組織間の協働方法の検討
4. 安全管理
 - ・ リスクへの対策
 - ・ 危険情報の収集
 - ・ 連絡体制の確保

立ち上げと本部内におけるロジスティックの役割を理解する』について、討論を始めたいと思っております。それはパネラーの方ご登壇ください。

それではディスカッションを始めたいと思っております。いくつかのポイントがあったと思いますが、まず各拠点のカウンターパートとのコミュニケーションという事で、今回は実際の保健所職員の方にご協力いただいたのですが、そのあたりのお話をお聞かせいただけると嬉しいです。いかがでしょうか？

Aグループ（鈴木）：宮古市役所で活動しましたAグループです。最初に市役所の方から災害の状況についての情報を直接もらいました。他機関との連携という意味では、研修の途中でたびたび宮古保健所の方から一生懸命アセスメントした資料をご提示いただきました。といっても、情報を直接もらってしまっているという状況が結構あり、反省点として挙げたのですが、そもそも最初にちゃんと情報の取り方を確立して、こちらから積極的に情報を取りに行くということをしないとダメなのだと思います。



眞瀬：それでは、釜石保健所はDグループ。お願いします。Dグループ（澤館）：釜石保健所に入りまして、釜石保健所の担当の方にまずコンタクトを取って、まずはそこから連携を始める…というような形で進めました。

眞瀬：こちらから事前に研修先の施設職員の方をお願いしていたのは、我々の訓練に施設側も一緒に訓練するというスタンスで参加してもらえたら嬉しいですという事です。一応お話をしていたのですが、そちらはやっぱり平時の仕事があると思いますので、なかなか全面的に協力いただくというのは難しかったかもしれせん。

Dグループ（澤館）：お忙しい中、カンファレンスには参加していただきました。

眞瀬先生：ありがとうございます。

指揮系統図では真ん中の2層目に当たるのですが、結構上と下とのやり取りというのが大変だったと思うのですが、大槌町役場のEグループはどうでしたでしょうか？上と下とのコミュニケーションという意味では。

Eグループ（藤田）：コミュニケーションというところでは、上からの釜石保健所からの連絡を受けるのはそれほど問題無かったのですが、下になる大槌高校との連絡が難しく…。大槌高校のFグループから見ると、上位の私達大槌町役場のEグループが情報や資器材の状況等をすべて把握しているように見えていて、本当は情報が欲しいとお願いをしているのですが、その情報は全部私達Eグループが把握している状態にもかかわらず私が依頼しているようになってしまったところが連絡をする上で難しかったです。

眞瀬：受ける側の大槌高校いかがでしたか。

Fグループ（澤田）：コミュニケーションについて、衛星電話とかメールとか、コミュニケーションツールについては特に問題なかったのですが、僕らも状況が全部見えていない中で、より精



度の高い情報を要求されてしまうわけです。そもそも精度の高い情報をその時点では提供できる状況ではないという事をご理解いただくことが難しかったです。

眞瀬：欲しい情報と与えることのできる情報の相違があったのかな？という風に思います。

衛星通信についてなのですが、今回、結構雨が降っていたので、

衛星を立ち上げる上で何か工夫されたことはありますか？

Fグループ（澤田）：大槌高校避難所だと、最初雨がかなりひどかったので一度体育館の中で試したのですがうまく出来なくて、軒下の所にビニールなど被せて設置し、取りあえず通信を確保しました。その後テントを立てて、改めて衛星電話を立て直しました。最初通信を確保するのが結構大変で、どうしようかなと思ったのですが、コントローラーの方から『早々に通信を確保しておかないと、何か起こったら通信できなくなりますよ』と言われたので、雨が降っていたのですが、何とか通信を確保することができました。

眞瀬：宮古保健所は、Cグループ。活動場所は2階ですよ。あ、それは釜石か。

Dグループ（澤館）：2階の会議室を本部として使わせていただきました。スターリンクは1階駐車場に設置して、衛星電話は2階会議室のちょうど南を向いている窓に設置したのですが、なかなか他のチームと連絡が取れず、特に派遣した大槌のチームとも連絡が取れず、すごく心配でした。

眞瀬：はい、ありがとうございます。スターリンクは、武器とすれば結構よい武器となります。今後スタンダードになってくると思われますので、これを上手く使えるようになることが大事かなと思います。

後は、情報そのものの集約を本部で出来たか？という事なのですが、多分、避難所の情報集約をするのにD24Hを活用されている方がいたようなのですが、それを上手く活用できたでしょうか？D24Hについては、参加者の認識はあまりなかったと思いますが。

Eグループ（藤田）：そうですね。私自身はD24Hの経験があるのですが、研修の中でD24Hを導入するということを提案できなかったですね。それは県の意向とか、保健所の意向、市町村の意向を、という所に入り込む。私もその業務についてロールとしては見たのですが、今回の役割として、ログとして使うところまではいけませんでした。

眞瀬：D24Hを知っているという方、手を挙げて。これはどういう機能を持って、どういう情報を共有するツールになりますか。簡単にご紹介いただければ。

Eグループ（藤田）：そうですね、D24Hに関しては様々なステークホルダーの方が災害に関わっている中で、情報が分裂しているっていうのがあると思います。例えば危機管理の情報を保健所サイドから取りに行くのが難しく、そういう所で情報をフラットに集約して必要な情報として可視化するという所をD24Hで行っています。その中でもd-サーベイという調査ツールがメインとして有名で、保健所現状報告システム、保健所の情報を取得し集約するものとか、あとは避難所のラビッドアセスメン

トシートを取得してその情報を使って調査をするというツールがあって、これがD24Hというツールになります。

眞瀬：今後も普及してくるツールじゃないかなと思いますので、皆さんも理解を深めていただけたら良いと思います。それから、広島大学から参加された方。皆さんJ-Speedを知っていますか？

Aグループ（永田）：ありがとうございます。

眞瀬：J-Speed。きれいに表にまとめられていましたが、そこらは問題なく？

Aグループ（永田）：はい。自分も能登半島地震ではJ-Speed班に入らせていただいて、その場所でどういった状態の患者さんがいるか？というのを可視化して本部に報告していたので、今回は避難所の情報として上がってきたものを可視化して、どこを優先的に対処すべきなのか？というのをリーダーに提案させていただきました。

眞瀬先生：ありがとうございます。避難所の情報をきちんと集めるのが重要となってきますので、使えるようになってもらいたいです。新しいEMISにもちゃんと入っています。使えるようにしていただけたらと思います。

何かこの部分でご意見や質問あれば、コントローラーの方も含めていかがでしょうか。

Ctrl 小澤：A班でコントローラーをさせていただきました愛知医大の小澤です。

各拠点のカウンターパートとのコミュニケーションということでディスカッションされておりましたが、Aグループに関しては、最初カウンターパートといっても、どこの誰と？どういった事を聞くの？と全く解らなかつた。じゃあここで何をするのか？となりましたので、実際に市役所の健康支援課長さんともお話しして、宮古市の災害体制や宮古市では医療と福祉がどういう事をやっているのかについて、ミニレクチャーをしてもらいました。

今後こういった市役所で活動する場合ですと、立ち位置を明確にするためにも、少なくとも市町村の地域防災計画とか、そういった物を事前に資料として配布していただければ、今後カウンターパートと情報交換とかがやりやすくなるのではないかなと思います。

眞瀬：ありがとうございます。

近藤：2つあります。先程気になったのが、情報を集めるのではないのですよ。情報を収集するのではなくて共有するものだという考え方があって、例えばAという所にいたならば、Bの人達が自分達でどういう情報をまとめているかという事を共有してもらえばいい。つまりBの現状分析と更新をAの人達は把握できるし、Aの人達の現状分析と更新をしっかりとBの人たちも把握するし、Cの人達も把握すればいい。Cに把握する現状分析の

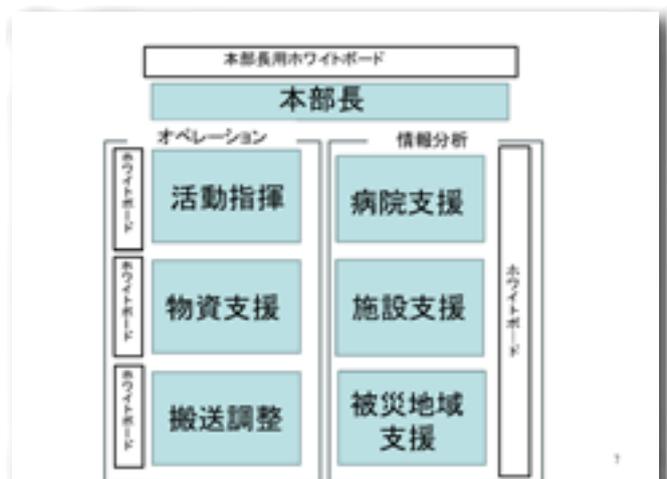
方針が立っているのであれば、その逆を埋めてあげればいいわけです。Aはこの情報が欲しいから自分たちで分析するためにBに情報を要求するというのは大概間違いを起こすことがあるという事を理解してください。

あと全体の話になりますけど、本部を運営している人たちがどうしているかを考えて活動しているかという、やらなければいけないことは、被災した病院や施設、そして被災地域に住んでいる方々に医療が提供できていない状況であるときに、なにがどういう状況で壊れているのかについて現状分析してニーズを把握



する。その情報を元に適材適所に人を派遣したり資源や医療物資を搬送したりする。今回の研修では主に被災地域の支援に対して、人や物資を送るというようなことをやっていただいたと思います。本部と言うのはこの6つの機能の中に集約していく必要があると考えていまして、その6つの機能ごとに現状分析し課題抽出し、それを本部長が集約していくというのが今の形となります。

昔はこういった本部を作るときに、DMATのシマ、DPATのシマ、JRATのシマのように組織ごとに形で運用していましたが、そういう形では良くないだろうと。やはり同じような情報処理をダブってやってしまう。



それぞれ人を動かすところ、物を動かすところ、あるいはそれぞれのニーズについて詳しいところについては、6つの機能のそれぞれのシマに入りながら活動していくというのが近年の形になっています。

今回も本部間の同じような機能をしている人達が、今回の研修でも沢山色々な団体から来ていると思います。それぞれ被災地域でバラバラに情報を吸い上げたり人を送り込んだりして分析してまいります。なので、そのような形であれば、この6つの機能



のシマ同士で、例えば担当同士で上下間の情報共有をしていくという形があっても良いのではないかと思います。

真瀬先生：はい、ありがとうございます。

今の本部のあり方、保健医療福祉調整本部ですね。このような感じで運営しているというお話をいただきました。何か質問ありますか？

Aグループ（鈴木）：D24HとかJ-SPEEDに議論が出たので、今後どのような運用になっていくのか教えていただきたいのですが、今回の想定では断水しているし停電状態になっている。避難所のアセスメントシートでは自家発電はありますが、水ありますという設定になっていて、要は明らかに文脈に合わない避難所設定となっていて、つまりそれは情報の精度・確度について、入力した時にどの程度の信用性があるのか？という事になります。D24Hとかそういったツールに入力された時に、これは明らかにおかしい値が入力されているというような場合、自動的に判別してくれるような機能を今後追加していくなどの方針はあるのですか？

真瀬先生：多分ちょっと答えが難しいです。

Ctrl 高桑：元 DHEAT 事務局の高桑と申します。藤田さんと一緒に保健所のアセスメントでお仕事させていただいておりました。D24Hというよりも皆さん芝浦工大の市川先生の方が良く分かるかなという風に思いますが、市川先生のすぐ下で、いろいろ開発していただいているのが藤田さんです。保健所のシ

ステムとか東北大学でいろいろ石井先生が開発したりしています。今、研究段階だったものが、ようやく国の予算がついて、J-Speed もそうだと思いますが、これを使ってやりましょうということで、ようやく実用段階になったという所です。このところAIとかいろいろと新しい技術が出てきていますので、何百カ所もある避難所が赤とか黄色とか青とか言われても中々情報処理が大変ですから、今後はおそらくAI等の技術を使って、どこに何が足りないのか、何をどのように優先すべきか、そういったところまで恐らく研究も含めて機能が追加されていくのではないかなと思うので、藤田さん一言お願いします

Eグループ（藤田）：情報リテラシーが強いと、私たちはシステム屋さんとして情報に関わらせていただけているので、今後AIとかエラー検知とかを入力時点で検知するとか、見る側に対しても情報を見てニーズを拾う側の支援という点は広げていきたいと考えています。

Ctrl 高桑：まだまだこれから発展していくシステムになるかと思えます。先生、ぜひご期待下さい。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

真瀬：CSCAのSセーフティ。項目4番目の安全管理について討論したいと思います。

雨という気象条件だったことと、移動の際にナビが上手く使えなかった、ナビが変なルートを示したというような事が報告されていましたが、実際にだいたい細い道を通られたりしましたか？

Dグループ（澤館）：このようなリアルティのある研修でしか学ぶことが出来ない経験が得られたのですが、実際に災害が起こったらこうなるだろうという想像しながら研修できました。トラブルとかは無かったですけど、想像しながらできたので学びが深まったと思います。

真瀬先生：大友さんどうですか。ナビの使い方とか、地図の使い方とか、ルートを設定するにあたり何かコメントいただけたら。Ctrl 大友：研修拠点担当のコントローラーでしたので、正直、活動している皆さんの後ろからは見ていないのですが、まあ問題なく目標の施設まで到達していましたし、到着報告の中で、道中の研修想定では特に設定されていないはずですが、『あそこのガソリンスタンドが生きている』とチェックして、EMISに情報を流したグループもあったようです。この研修に来ている人達は、そういう意識もあって経験値が高いのかな？とすごく感じました。

ただ、安全に関しては、安全確保のためであれば危険な所に近寄らなければ良いのですけれど、災害支援なので危険な所に入っていくわけですから、近寄らない方がいい所にも近寄っていくのが災害の救援だと思うので、今回研修に参加している人達みたいに、常々そういう学習なり、その安全に対する意識を

持っているっていうのが、先程のワンシーンにも表れていたと思います。そういった事を忘れないようにしたい。わざわざ危険度が高い所に入らなきゃいけないのだから、よくよく注意しなければならないのだという意識を持っていただければと思っています。

近藤：道路上の安全でやっぱり一番やってはいけないのは、災害時にナビの情報を妄信して進むということです。ちゃんと通れる道というのは、事前に情報があがってきますので、それとナビの情報と合わせてルート検討するべきです。安全管理もしな



いでナビの情報だけで災害時に被災地に入るとい感覚はナンセンスです。ナビの情報は参考として使うのはいいと思うのです。但し災害時は平時と違ってナビは正常に動かない、ナビがちゃんと今通行可能な道を提示してくれるのか？という事を確認できていないので。なので、ナビの指示が違ったとか、そういう話になっちゃうのですけどね。ナビの情報を全面的に頼っちゃうという事態は一番避けなければならないと思います。ちゃんと地図を理解して、その地図通りに自分が思っているところに向かっているのか。そういう時にナビが参考になるのであれば、その情報を参考にすれば良いし、それくらいの気持ちでやらないと災害時は道中の安全確保はできないと思います。

真瀬：ありがとうございます。

Ctrl 大友：1点だけ、近藤先生ご指摘に加えまして…【ナビに頼れない】というようなご指摘がありましたけれども、実際の災害の時、自分が向かおうとしている先から来ている車があります。道の駅で休憩している時に、被災地方面から来た車がいたら、その先の状況を聞くことが出来ます。実際災害の時は、対向車が来て、その車が止まっているような所があれば、是非そういった機会を利用して、道路状況について直前にそこを通ってきた人の方が詳しい場合もありますので、そのあたりのことも機転を利かせてやっていただければいいと思います。

近藤：安全管理の件ですね。今回、熊の問題がありました。

真瀬先生と釜石のとある病院に向かったときに、目の前に鹿が

いましたし。災害時に活動する上で、安全上のリスクとして今まではあまり考えていませんでしたが、近年、動物によるリスクも考慮する必要があると思いました。

真瀬先生：ありがとうございます。それでは CSCA のCのコミュニケーションについて議論をしていきたいと思います。項目3の『組織間の連携について理解する』についてです。

この研修会、一つの組織だけではなくいろいろな組織の人が集まってグループを作っている訳ですが、比較的多職種が集まっていたBグループはどうでしたか。連携について学ぶことはありましたか。

Bグループ（服部）：Bグループはいろいろな職種の人っていて、だいぶキャラも違う人が集まっていましたが、結果的にお互いの良いところを引き出し合えたかなと思います。各自、具体的に何がどこまでか？と特に確認はしていなかったのですが、昨日の配置を含めてメンバーの動きが目に見えて良くなってきたことは、自分としては実感しましたので、それぞれ感じる場所があっ



て、成長したのだろうなと思っております。

真瀬：ありがとうございます。NGO や NPO から参加されている方も何人かおられたのですが、自分の団体とはちょっと違うな？とか、こういう風にした方が良いのではないかと感じられている所があれば少しコメントをいただきました。HuMA のCグループ高橋さん。

Cグループ（高橋）：NGO に関しては J-Speed を集中して使い始めたところがあったので、そういう所の流れはロジスティクス研修を通じて共有できるのかなと思っています。

真瀬：近藤先生、このあたりの連携についてコメントをいただければ。お願いします。

近藤：今回の研修でもいろいろなチームからメンバーが来ていると思うんですね。それぞれの団体がそれぞれのシマを作るイメージがあったと思うのですが、やはり先ほどお示したスライドのように一番左側にある病院・施設・被災地域の住民の方々。被災地内で医療や福祉を支えている人達を僕らが支えるという

構図が基本になっていて、それに対して支援を取りまとめるのは、それぞれの行政の保健医療福祉調整本部であり、保健医療福祉調整本部を直接支えるのが DHEAT だったり、最近名称変更しましたが、DMAT のコーディネートチームだったりということです。発災当初はまずは DMAT が被災地に入って支援を始めますが、その後病院や施設や地域の保健医療福祉を支えるさまざまなチームが被災地に支援に入ってきて、DMAT から業務を引き継いでいく。それは例えば災害支援ナースであったり、DWAT、JMAT であったりするのですが、皆さんはこれらのチームのまとめ役になるように期待されています。全体のマネジメントの方は DMAT コーディネーションチームが行うとしても、調整を受けた後に、それぞれの自分の所属するチームの中でまとめていただく役割を、皆さんには期待しています。

眞瀬：多職種間で連携、組織間で連携しながら災害対応をしていくことについて、近藤先生からご説明いただきました。

次は、その他の部分として、活動目標の所にはないのですが、例えばマスコミの対応という事で報告されたチームがあるのですが、どのように対応されましたか？

F グループ（澤田）：岩手めんこいテレビのスタッフが来て取材させて欲しい、避難所の様子を見させて欲しいという要望がありました。一般論としてプライバシーの問題があって難だろうと断ったのですが、それは DMAT に取材させてほしいと要望されましたので、上位本部に確認させて欲しいとお答えしました。そしたらその後に、そのテレビ局のスタッフが来て『ちょっと見てください。他の局が様子を放送していますよ。』となって、確認したら避難している方が写真を撮ってテレビ局に提供したということでした。もしかしたら避難所の方が取材を受けるのは、避難所のリーダーの方が取り纏められたりするのかもしれませんが、今回はこのような事例がありました。

B グループ（服部）：同じくテレビの取材が入りまして、DMAT の活動の様子を撮りたい、避難所の取材をしたいという要望がありました。避難所に関しては、避難所の責任者に許可を取って下さい。我々の方に関しては、外から撮る分には別に構いませんがクロノロなどが絶対映り込まないように、個人情報入らない状態でしたら構いません。それ以上のことであれば上位本部に確認します…というような形で取材は受けさせていただきました。

眞瀬：インストラクターの方で何かコメントありますか？

Ctrl 高桑：藤原さんの方から SNS にアップに関しての依頼事項がありまして、これは報告的で良いなと思ったのですが、実は A グループが昼飯を食べた時に食堂のところに【ライブ配信はおやめください】と書いてありました。恐らくこれから災害があると YouTube のライブ配信とかがあっちこちで行なわれる

可能性があるなと思いました。今後、実災害ではマスコミに關してはある程度規制は出来ると思うのですが、勝手にライブ配信をする輩が出てくるのではないかなと思っています。我々保健医療福祉関係者としても、どういった規制をかけるべきか事前にきちんと決めておかないと、勝手にいろいろなことをやってしまう恐れがあるなと感じました。

眞瀬：そうですね。ライブ配信の可能性は高くなってきます。自分だけであれば良いのですが、周りの方も巻き込むとなると、問題が大きくなる可能性が高くなると思いますので、避難所の中で自治を作っていく事はすごく重要になると思います。その中で、マスコミ対応をどうしていくかという点も、避難をしている方々の中できちんと決めていくということも重要になってくると思います。

それから通常のマスコミについては、彼らも情報が欲しいといますので、避難所の代表の方を含めた記者会見など、毎日何時に何か答えることがあれば答え、コメントが欲しいければ要望するという風にして、避難所の中には直接入れないようにし、何処かにそういう場を作ってマスコミに対して発信していく…などの対応が必要になっているのかなと思います。ご意見のある方お願いします。

Ctrl 青木：どうもお疲れ様でした。皆さんマスコミ対応ってどうでした？マスコミに対してネガティブなイメージをお持ちなのかな？とも感じましたが、マスコミを上手く味方に付ける事も必要なのかなと思います。取材を断り無碍に扱くと、マスコミって結構出てくる文章が変わってくる場合がありますので、しっかりマスコミを上手く使っていくということも大事かなと思います。我々が持ってない情報を持っていたりすることもありますし、上手く付き合っていくと良いかもしれません。ただし、雑談程度に話した内容がいきなり記事になったりする場合もありますので。雑談だからといって、ざつぱらんに意見を言うのも注意が必要な場合もありますが、その辺ご配慮いただければと思います。

眞瀬：例えば『毛布が足りない』とテレビで言うと、すごい量の毛布が来ます。そういった点では上手く使っていたら



良いと思います。

それから本部活動をする上で、資源が無いという情報が下位本部から上がってきて…というケースがあったかと思います。資源を確保する場合、あまり状況を考慮せずに、要望されたらすぐに上位本部に情報を上げてしまうのではなく、その地域にどの程度の資源があるかどうかを確認し、どうしても足りないのであれば上位本部に要望をするということが重要となりますが、その調整は各グループ上手くいきまされたか。

Aグループ（鈴木）：宮古市役所です。物資の件に関しては、現場からの要望をすぐ頂戴しました。危機迫る要望を頂戴して、もうどうにかしなければならぬということ、具体的な例を挙げますと、仕切りのできるプライベートを確保できる物が欲しいので、仕切り付きの段ボールベットを500個用意して欲しいという強いご要望でした。でも500個って本当に置けるのかどうか、まずは吟味して欲しいですとお返ししました。もともとこの物品に関しては用意がないと確認できていましたので、この件については上位本部に要望として上げさせてもらいました。物資というのは依頼してもその場ですぐにポンと出てくるものではないので、現場で対応できるものについては、ある程度、我慢じゃないですけどできる範囲で対応いただく。あとは周辺の避難情報が集まってくれば、キャパシティを超えている所に対して、近隣でこの辺りの避難所が空いていますよというようなご案内も出来るかな？と思いました。市役所としてはそのような周囲の避難所の情報も併せて精査させてもらっていました。

真瀬：ありがとうございます。釜石保健所はどうですか。

Dグループ（澤館）：かなり資源に限られた中では、下位本部から情報を上げていただいて、いくら何々が欲しいです…と言っても、そこは根拠を求められる訳ですが、今回大植に行ってくれたチームは、その根拠を持って何が良いですっていうことをしっかりと伝えてくれたので、私達としても上位本部に報告する時に、こういう理由で何が欲しいですと伝えられることができました。ロジ力がすごく高いグループだなと感じていました。

真瀬先生：ありがとうございます。このあたり、何かコメントありますでしょうか。

Ctrl 柴田：本部で物資支援をさせていただきました柴田です。皆様から上げられて来た情報は、こちらでクロノロ等でも確認させていただき物資支援班で対応するという形をとっていましたが、当然、避難所等の設置主体である市町村に備蓄がないのかどうか？というのをまず確認させていただくことと、合わせてそこに欲しいと言っている物が、何かしらの根拠があるのかを確認させていただきました。Dグループの要望については、そこに避難者が大体このくらいの人数いるので、一人当たりこれくらいは必要だから…などという根拠もあって回答していただきま

した。それで県で調達できるものに関しては、いつまでに何個調達できそうですよ…という調整をかけて回答をさせていただきました。ラップボンなど皆さんが持っていった物品についても調達出来ますよ…というのがあったのですが、仮設トイレを用意して欲しいという具体的なオーダーがあって、仮設トイレといふとなかなか大きなもので、また花火大会レベルの必要数ですね…という話で、やり取りした経緯がありました。何処に設置するのですか？という情報を含めて欲しいかなと思っていたので、どういった物が、どういった根拠を元に何個必要で、いつまでに必要かという所をまとめていただきましたので、我々としては非常に調達ないし調整しやすかったです。

本部活動の詳細についても、ここで簡単にご紹介させていただきます。皆さんの車に搭載したスマートフォンから位置情報を取得させていただいておりました。これは研修運営の安全管理上させていただきました。およそどのあたりに居るかを確認させていただいて安全を確認させていただきました。

昨日は沿岸部に暴風警報が14時くらいまで出たので、その辺りをちゃんと見る事が出来るように気象庁の情報や雨雲レーダーなどを見ながら大型の液晶画面が4台くらい並べて本部運営をやっていました。

クロノロに関しましては、水などの状況に関しても、液晶画面上に表示して情報を落とし込めるようにして、進捗状況を物資支援班で確認をさせていただいていました。あとは、活動指揮について、皆様、救護班として参集拠点本部に来ていただき、その指揮の元に様々な保健所に行っていただいて、活動中であるとか、本部活動をやっているというのを逐次入力していただきました。僕が感動したのは、朝の段階で撤収を入れていただいたBグループ。これをやっていただいただけでも僕が昨日EMISの講義の中で言って良かったなと思っているところです。ちゃんと帰る時まで入力して欲しかったなと他のグループの方には思ってしまったんですが…一応本部としてはこのようなかたちで、先程の6シマ（機能班）の話がありましたけども6シマで展開をさせていただきながら調整とか調達とか返答をさせていただきました。

真瀬：ありがとうございます。実際の本部について、何かご質問がありますか？Cチームお願いします。

Cグループ（松崎）：Cグループは調整本部をやらせていただいたのですが、毛布が500枚、ベッドが500個。何故かラップボンだけが3台というのが調達要望として上がってきたのですが、グループのメンバー内で、実際にそれらが本当に欲しいのか？という話になった時に、やはり物資の情報が全く無かったということ、自分達も情報をきちんと聞きに行っていなかった部分もあったのにもかかわらず、そのまま上位本部に要望を上げて

しまったという経緯がありまして、もう少し吟味する必要があったのかなど改めて思いました。確かに500個に対してトイレが3つで本当に良いのか？と言われると、確かにそうだなって思ったので。そういう所は予め調整してから上位本部に要望を上げるべきだったなという反省点が1つありました。

眞瀬：ありがとうございます。

それでは項目1の獲得目標で、【ロジスティクスの基礎を習得する】について討議したいと思います。【派遣地までの円滑な到達】については、先程ナビを含めてお話をしたかと思しますので、ここでは【衣食住の確保】について重きを置いてお話をさせていただきたいと思います。まず【衣】ですね。だいぶ雨が強かったわけですが、雨具等を個人で準備してきたとかありますか？ 関東以南はまだまだ暑いですが、岩手は朝晩結構寒いと思います。この時期であれば防寒対策…とまではいかないと思いますが、寝る時の暖の取り方とか、このあたりについてはどう考えられたかとか、どういう準備をしてきたとか、津波被災地に一番近い拠点に派遣されたBグループにコメントをお願いします。Bグループ（千葉）：メンバーそれぞれで雨具の準備をしてきたと思うのですが、予想以上の雨の強さで、カッパでいいやと思っていた方は傘を持ってきてなかったと後悔していましたし、カッパすら持ってきていない方もいらっしゃいました。雨具に関しては、もちろん持っていける物資の量は限られますが、その中でこれはいらぬではなく、むしろ必要。予想以上の物は準備しておく必要があるのかなと思いました。

Bグループ（服部）：防寒対策についてはどれを選ぶかが難しいというのがあって、日赤さんなんかは日赤さん所有のいいものを持ってきていましたし、私も個人で暖かいものを用意してきたのですが、かえって暑すぎてはだけて寝てしまって、結果ひとりパンツで寝てしまっていました。

Bグループ（千葉）：私がおのようになってしまったのは、登山の時に使っていた厳冬期用のシュラフを持ってきたのが原因です。以上です。

Bグループ（服部）：ちょっと過剰に準備してしまいました。

眞瀬：ではF班はいかがですか？

Fグループ（中村）：雨に関しては、カッパとかを準備してはいたのですが、先程も話がありました通り、かなり雨が強すぎたので、一旦外での作業を止めて、雨に濡れない場所での作業を優先しました。そういう対応をすることで、雨対策を考えて実行することが出来たのかなと思っています。

寒さ対策については、私達が寝た所が体育館でしたが、扉を完全に閉め切ることが難しいような状況の体育館でした。一応扉は閉まっていたのですが、皆が近づいて寝ることはやめて、今回は離してそれぞれで寝所を作って寝るようにしました。岩手



入りした時点で、既にちょっと寒いよねっていうのがありましたので、前日にホームセンターと一緒に行ってちょっとした衣料を買いに行きました。それぞれ寝袋を持ってきていましたし、毛布も余っているものがあつたので、必要な人は自由に取れる体制をとって、夜中寒かったらそこから使っていくという寒さ対策ができました。しかし、このやり方ですと各個人に任せてしまうところが大きくて、ロジとして私が衣食住の管理をしていたのですが、担当のロジとしてグループのメンバーに、今寒いかどうかを聞くことを全くしていなかった。その点に関してはグループとして管理をしていかないと、その人任せにしてしまうと、こういう現場で我慢しちゃう人も出てきちゃうと思います。ここはしっかりグループのメンバーに聞いて対応していきたいところです。

Bグループ（千葉）：言い忘れたことがあってもう一回発言させていただきます。今回、自分達の避難所では衛星通信を確立する時に傘ってすごく重要だなと思いました。というのも、カッパは個人を守るためですね。傘は物資を雨からも水からも守る点でも使えると。衛星通信を確立する時に、軒下だと反応なくて、どうしても野ざらしになっている場所でしか衛星の電波が取れなくて、人はカッパを着れば大丈夫でしたが、衛星通信機器が野ざらし雨ざらしになってしまいました。その時、うちの三



上さんが衛星通信を確立していた私に、こうやって傘を差し出してきて、そうすれば人も守れるし衛星通信機器も守れて、傘がすごく役立ちました。

眞瀬：どこに行くかを考えながら準備していくことが大切だと思います。

食事については、蕎麦アレルギーの方がいらっちゃったと聞いていますが、何か工夫したことがありますか？

Aグループ（宮田）：蕎麦アレルギーはそんなに強くはないのですが、自由に食品を選んで良いですよということで先に選ばせてもらって、それから皆さんに食品を選んでいただきました。種類が沢山あったし、特に何も困りませんでした。

眞瀬：不自由な思いはしなかった？それは食品のチョイスがいっぱいあった？

Aグループ（宮田）：はい、そうです。

眞瀬：JDA-DATの方がいたと思います。こういった点に関して、災害時どう考えたらいいかコメントをいただけますか？

Aグループ（山口）：JDA-DAT 山口です。今回はうちのグループに蕎麦アレルギーの方がおりましたけれど、支給されている食品が判りましたし、現在アレルギー対応食もいっぱい出てきました。28品目を抜いた備蓄食なども出回っています。もし何かあれば、今回はグループの中でしたけれども、避難所の中でアレルギーの方とカリストをいただければ、そこから調整して上位本部に要望を上げたいと思っています。

Bグループ（高橋）：同じく、JDA-DATの高橋です。今回、まず本部の皆さんに感謝したいのが、いろいろな種類の食事を用意していただいたことです。これによって参加した皆さんが食事を選べる。そして温かい物を食べることができる。その点について感謝しかないと思います。もう一つ付け加えておきたかったのは、いくつかのグループでおやつを持ってきて皆さんに配っていたという点です。そういった意味で我がJDA-DATではです。講習会をやる時に心ときめく何かしらの食べ物や一品持ってきた方が良いという物を学びにしていた記憶があるのですが、山口さん。

Aグループ（山口）：・・・。

Bグループ（高橋）：すみませんでした。（笑）私、今回持ってこなかったのですが、次回参加する時イチゴ煮の缶詰を2、3個持ってこようと思っておりました。以上です。

眞瀬：ありがとうございます。食はすごく大切ですので、温かいものを食べることができれば、力も湧いてきますし、なんとなく簡単なものだけでいいやということではなく、きちっと献立まで考えて…とはなかなか難しいかもしれませんが、是非食については充分考えて活動していただければと思います。

衣食住の所では、トイレとか寝る環境について女性からご意見

をいただきたいですが、Cグループでトイレと寝床については何かありましたでしょうか。

Cグループ（藤田）：Cグループでは、保健所内で使っていない浴室がありましたので、そちらを提供していただいて、トイレとして個室にちゃんとした空間を確保できました。また、ラップポンを使わせていただいたのですが、匂いも全然しないですし、使いやすくて良いなというのを経験して、今後導入を進めてい



きたいなと思いました。

あと、寝る部屋に関しては、グループのメンバーの皆さんとご相談させていただいて、女性用に部屋を提供していただきました。今回、女性と男性を分けて寝る事が出来たというのは、安全の面などについて安心できたので良かったのかなと思います。やはり場所が一つしかないという時に、プライバシー等を配慮しながらゆっくり休める環境をいかに作るか？というのは一つ課題だと思ったので、寝る環境とか、食べる場所はすごく大事なということを実感しました。

眞瀬：ありがとうございます。どなたかインストラクターで寝床、トイレ、男女についてなどコメントをいただける方いらっしゃいますか？

Ctrl（青木）：寝床ですか。今回私は寒いと思ったのでホームレスシェルターを作ってみました。簡単に作れますので。長机の所に毛布を貼ってですね、その下で寝ると非常に温かくなります。むしろ私も暑かったくらいです。これしかネタが出ないです。すみません。

Ctrl（奥野）：寝床ですが、皆さん銀マットを敷いて硬い所で、良く眠ることができた人？あら、意外といらっしゃる？！体痛くて、僕も若い頃は硬いところで寝たのですが、途中から寝ることができなかったので、能登半島地震を機にコットを買いました。結構キュッと小さくなるコットで軽いコットなので、今回持ってきたのですが、やっぱり要りますね。良く寝ることができました。

資機材って何をどれだけ持って行っていいか？という話も出て



いましたけれど、結構かさばるので、自分の持って行かなければいけない物、チームが持って行かなきゃいけない物、そして運ぶツールとか車とかをいろいろ考えながらになります。個人的にあれば良いと思うのはコットだと思います。寒さも疲れも防げるかなと思います。

Ctrl (大友): 皆さん女性がメンバーの中にいらっしやると、ちゃんと気を遣うと思いますが、時代の流れなのか、男性に気を遣われるのが嫌だという女性もいる訳ですよね。でも、そういった女性の方から、気を遣わなくても良いよって発信してもらわないと、所詮、男の考えの行きつく先って女性の深さにはかきません。ここに居る人たちは、女性の意見をきちんと聞ける人が多いと思うので女性の方から発信してもらって、こういうふうにしてほしいと要望を出してほしいです。例えば今回コントローラーとして皆さんの活動を見ている中で、寝る場所を女性と男性分けていたのですが、女性が通路側に寝ていないか?と思ったのですがそこはあえて言いませんでした。その点については気にしていないから女性は何にも言わなかったのだと思うのですけ

ど。気にする人がいるのであれば、ちょっと通路側はやめて欲しいと発信してもらおうのが大事だと思います。男性の気遣いと女性の発信と遠慮が無くなるのが一番だと思います。

真瀬: ありがとうございます。それでは本部の方まとめてお願いします。

Ctrl (柴田): 衣食住に関して、本部として特にまとめる所は無いのですが…まずは皆さん寒い中や雨の中で活動していただき、また蕎麦アレルギー等についてはJDA-DATの方々とか、色々な職種の専門性をもって対応していただいたと思います。食べる物に関しては、温かい物を食べることが出来たと思っていますし、トイレを使っていた方に関しては匂いがほとんどなかったということを実感していただいたと思います。寝る場所の対策について先程のコットの話もありましたが、皆さん実際に寝てみて、こういったほうが良いかなと改善をしていただいたり、必要であればそういった物資の導入を検討していただいたりするのもよろしいかと思います。シャワーについても、清拭だとか、シャワー浴とか、実際試していただいた方にご意見をいただきましたかったですけれども、今回は時間の都合で割愛させていただきます。

真瀬: ありがとうございます。それではこれで、ディスカッションを終了したいと思います。

何かあれば研修後のアンケートに記載していただければ、来年度以降の研修に生きてくると思いますのでよろしく申し上げます。



日本災害医療ロジスティクス研修運営委員長

眞瀬 智彦

第11回目の研修となった今回も大きな事故やトラブルなどなく終了することができた。まずは関わっていただいた全ての方々に感謝申し上げます。今回「ロジスティクスの基礎を習得する」、「各拠点の本部立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割を理解する」、「多組織間の連携について理解する」、「安全管理」を獲得目標として行った。実践研修では宮古医療圏、釜石医療圏を舞台とし、宮古市の避難所を初めて拠点として使用させていただいた。参加者はいずれの目標も概ねよく理解されており、実施することができたと考える。特に、チーム内のコミュニケーションの確立、適切な役割分担、その役割分担に沿った行動はできていた受講者が多く見られたようである。

獲得目標の「ロジスティクスの基礎を習得する」に関しては、今回雨天ということで雨具や夜の防寒対策が必要であったが、参加者によっては準備のない方もいたようだ。また、過剰に準備をしてしまったというような声も聞かれた。現地の状況に合わせた準備の必要性とその難しさが実感できたのではないかと。また、食事についてはアレルギーなどの観点からも食事の選択について検討したグループもあった。アレルギー対応食なども出回っており、このような準備も必要であることがわかったのではないだろうか。

「各拠点の本部立ち上げと本部内におけるロジスティクスの役割を理解する」に関しては、指揮系統の把握で混乱したチームもあったようだ。活動開始時に必要な情報を収集・記録・伝達・共有することが重要であること、痛感したと思う。また、本部内の機能についても今一度確認してもらいたい。今回全ての班にスターリンクを配置し、立ち上げも受講者が行なうようにしたため、多くの方が使用できたと思う。これによりweb会議やEMISの入力も滞りなく行えることを経験できたであろう。一方で、今回雨だったという事もあり、通信の立ち上げに苦労した班があったように見受けられた。スターリンクなどの衛星通信を上手く使えるようになることも大事なロジスティクスの役割である。

「多組織間の連携について理解する」に関しては、この研修の特徴として様々な組織からの受講があることが挙げられる。実践研修では、なるべく多くの職種の方とコラボレーションができるよう班分けを行っている。その中でうまくコミュニケーションをとり、それぞれが持っている知識を集約させることができたように見受けられ、感銘を受けた。様々な立場で被災地に入った支援者を一つのコーディネートの下で活動すること、さらに被災地で地元担当者など多様な職種の方を支えるためにも他職種の支援が重要であることが理解できたと思われる。また、マスコミ対応について検討したグループもあったようだ。今後の災害対応の一環としてリスクコミュニケーションは今後さらに重要な要素となるであろう、是非この面の知識も深めてもらいたい。

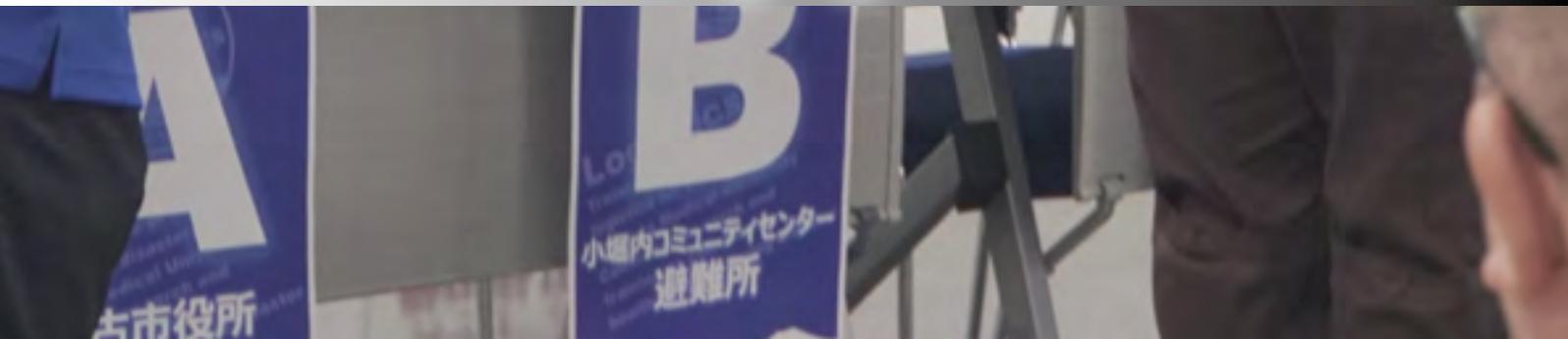
「安全管理」に関しては、雨という気象条件だったことや移動の際にナビが上手く使えなかった事、余震などの対応などの課題が挙がったグループが多かったように見受けられる。今一度活動の中での安全性のポイントについて確認いただきたい。

今回は、実践研修後に「被災地ツアー」と称して、東日本大震災の際に実際に対応された方や現地の語り部などにご講話いただく機会を設けた。受講者、講師のアンケートともに、「実際に被災された職員の方の話は想像を遙かに超えて胸に刺さりました」、「是非続けていただきたい」など満足度が高く、参加者の胸に響くものになったようで、嬉しく思う。

重ねてになりますが、本研修を開催するにあたりご協力賜りました施設のご担当者、講師の皆様、ご後援、ご協賛くださいました皆様に感謝申し上げます。

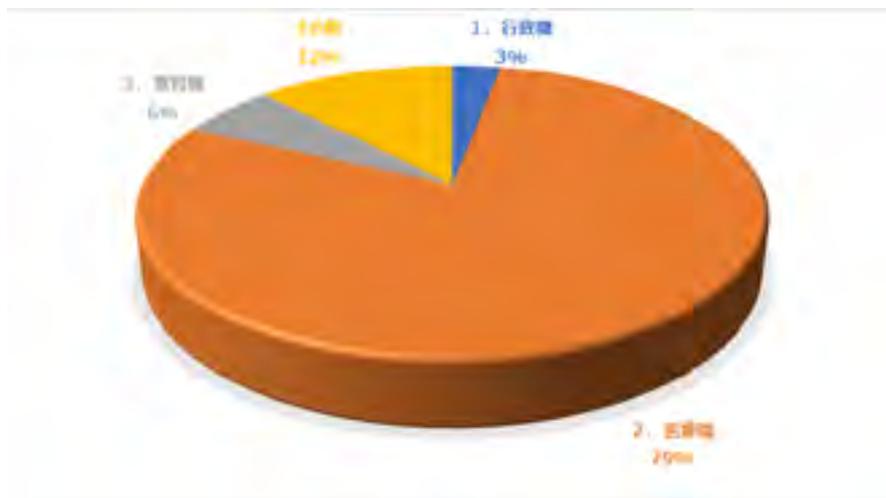


Appendix

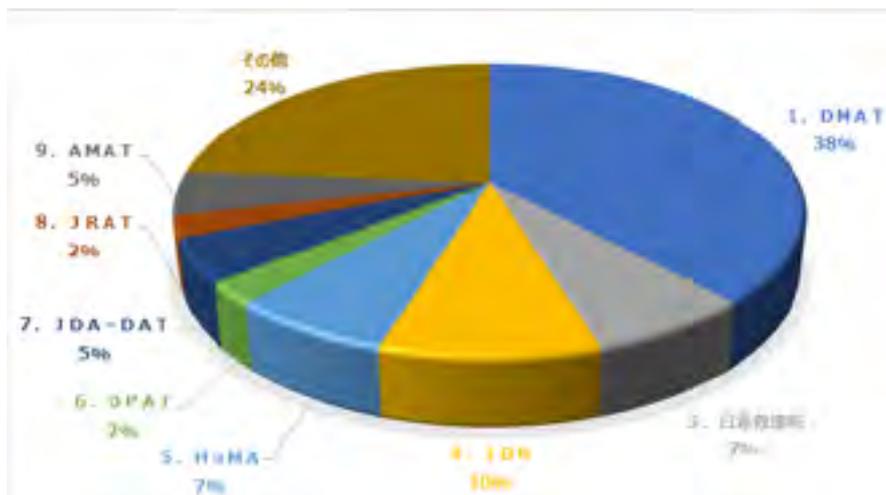


アンケート結果

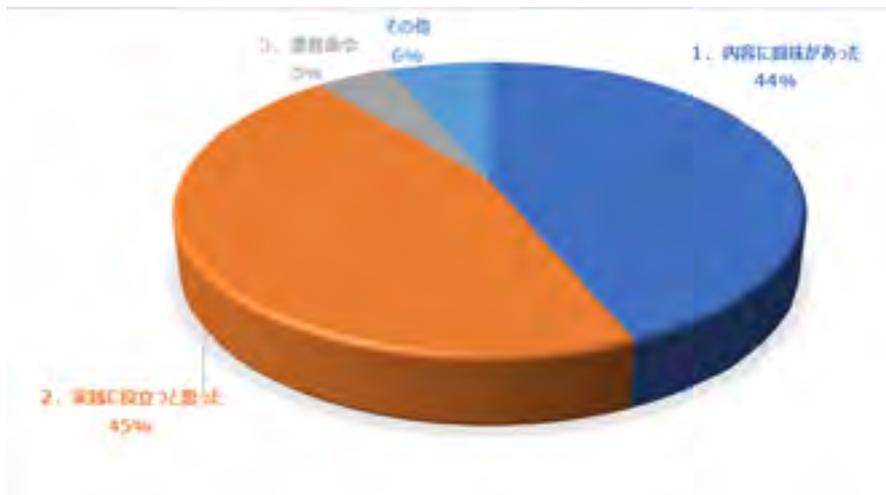
1. ご自身に当てはまるものを選択してください。



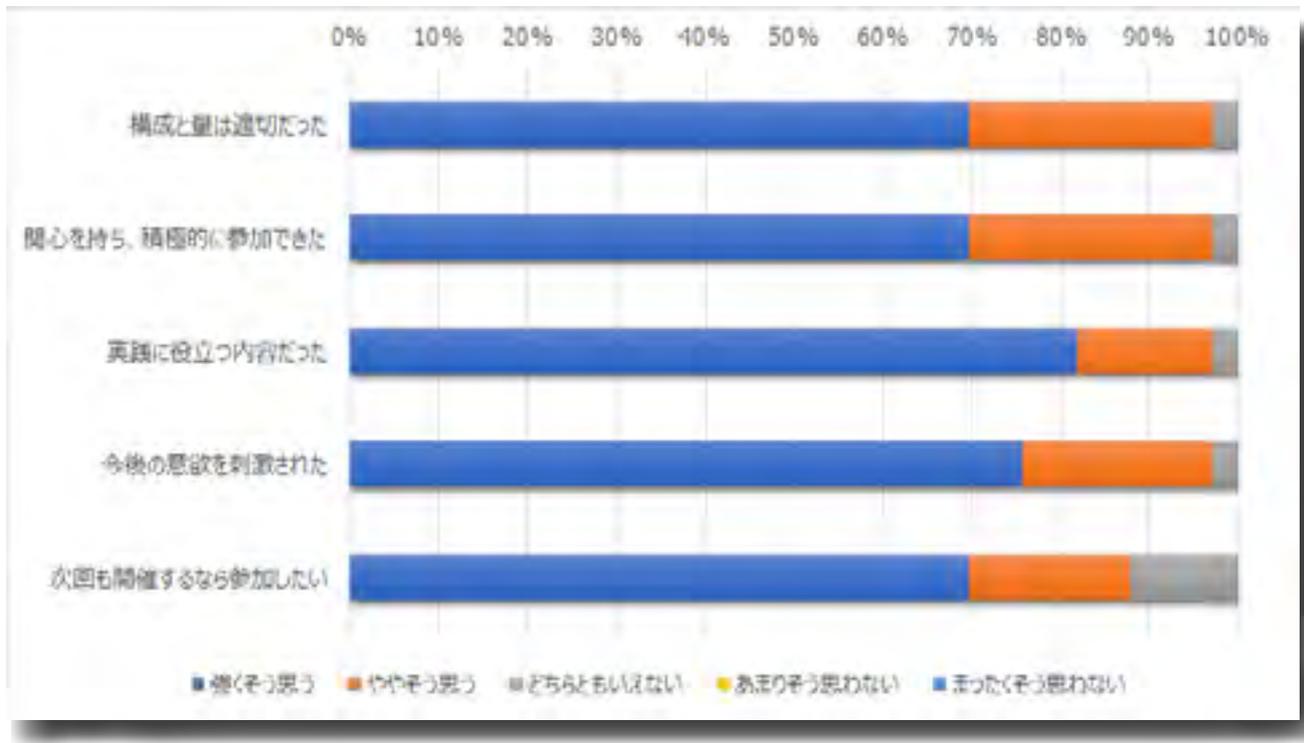
2. ご自身の所属する団体について（複数回答可）



3. 受講した動機について（複数回答可）



4. 本研修全体の感想について



5. 本研修について、改善してほしいこと。

- ◆ 最後の討論会は全体として非常に建設的で、有意義なものだったと感じております。
- ◆ 強いて言うなら、能登半島地震の派遣を考えると、就寝環境はもう少し過酷でも良いのかなと思いました (ex. 屋外でテント、季節を夏 or 冬にするなど)。また、被災地でもカーナビは使えますが、研修の制約として「ナビ使用禁止」とした方が、事前の経路設定の精度が増すと思いました。
- ◆ 実践演習では普段経験のない状況を与えられそれをチームでどのように解決していくかを考えること自体がとても良い訓練になりました。各事案ごとに対応方法をチームで検討し、その内容についてインストラクターの方から多くのフィードバックをいただきました。実際の災害現場では「正解はない」とのコメントをいただいたところではありますが、可能であれば具体的な最適解のようなフィードバックもいただくと、実際の活動での対応の一つの方法として身につけられると感じました。
- ◆ 想定終了時期を明確にして欲しい。岩手医大までの帰還経路もコントローラーに指示されたが、討論の場ではEMISを撤収にしておく方が良いとのことだった。撤収であればプレーヤーに経路選択の自由を与えて欲しい。
- ◆ 貴重な経験になりました。
- ◆ 私は過去に中国ブロックのロジ研や災害支援の経験があったため、よりこの研修で得られたものが大きかったと感じた。一方で未経験だとこの研修の意義？価値？のようなものが減ってしまうのではないかも感じた。(実践的過ぎて、付いていけない場面もある？)
募集要項に災害支援の経験、ロジ研の研修受講歴等があると良いことを記載してもよいかもしれない。
- ◆ 派遣先が決まってから、各グループで必要な資料等を準備する時間がもう少しあれば、と後で思いましたが、限られた時間の中で動くという想定なら仕方ないと思います。
- ◆ クロノロについてのフィードバック、特にチームクロノロで得た情報を確認するプロセスがあってもよいのかと思いました。もしくはイントラによるデモも良いかも。
実践訓練では最前線への派遣でしたが、最前線のチームにももう少し避難所の状況を付与していただいても良

かったかなと思いました。実際であれば自分たちの目で確認できることも付与されないため少々戸惑い、上位本部から詳細情報（人数や内訳など）が降りてきたので、やり取りに困った部分がありました。あと県立病院には仮想でチームを入れといてもいいかなと思いました。

- ◆ 保健医療福祉調整本部内での実践的な活動を座学でもりより深くして欲しかった。
- ◆ ✓ 保健所と市役所の立ち位置の検討
（縦の関係を全く知らない受講生にとっては、理解が難しかった）
⇒事前動画等で岩手県の災害医療圏の説明や災害時組織図の説明動画を作って説明されてはいかがでしょうか？
- ✓ 現状分析と課題／活動方針の説明
⇒本部運営として今後使用していくのであれば必要かもしれません
- ✓（実地研修にて）進行が速かった場合の負荷の準備
- ✓ 経路選定やクマが出た場合の対処など、安全面に関する振り返り時間の確保
（注意すべき点や休憩場所の確保など）
- ◆ 実動訓練で使用できる資材の説明をもっとして欲しかった。
- ◆ 改善というか、訓練中の食事が豪華すぎたかなと思いました。

6. 追加してほしい研修内容について。

- ◆ 実践研修が翌7時に終了になるが、本来の運営では、朝のミーティング、その日に来た隊へのブリーフィングなど非常に重要な作業があるとおもうので、被災地の講義を聞くことも決して、軽視すべき内容ではないが、折角、宿泊しているのであればそのあたりまで含めていくとより実践的ではと思った。
- ◆ 3日目の午前中まで実践研修ができると、収集・分析した情報をもとに活動方針をたてて、それを発信する…という一つのサイクルが体験できるので、時間の制約はありますがやってみたくてと思いました。
実際、能登の時に夜なべして翌日の活動方針を示すということを体験しましたが、上手くできなかったという後悔があるので。
県の本部の運営も練習してみたいと思いました。
- ◆ 実災害を想定した外部団体との調整業務が含まれる状況付与が、さらに多く取り入れられるとありがたいです。
- ◆ 事前研修でグーグルドライブの使い方などを教えてもらえるとありがたい。
- ◆ 保健所内での活動であった為、保健所内に活動スペースを作れたが、テントなどの設営を経験してみたかった。
- ◆ 実災害時は夜間帯での対応も求められると思いますので、今回のような1隊での活動の中で、夜間どう対応するのか（休憩や本部などとの連携、不測の事態への対応など）をシミュレーションする演習などもあれば良いと思いました。
- ◆ 岩手医大が使用しているDMATカーや資機材を見てみたかったです。
こんな感じで資機材管理しています。 みたいな、倉庫があれば参考にしたいでした。
動線で工夫されていることなど、とにかく他施設でのやり方は興味があります。
- ◆ D24HやJ-SPEEDなどはeラーニングだけではなく実際に入力する研修を行った方が良いと感じた。
- ◆ 今回の形がとても完成されていたと思います。
- ◆ JSPEEDについて
- ◆ D24H、J-SPEED、金銭管理
- ◆ 多々ありますが、もう一日日程が多くても良いかなと思いました。EMIS上の箱作りなども経験してみたかったです。
- ◆ 保健医療福祉調整本部内での実践的な活動を座学でもりより深くして欲しかった。
- ◆ ✓ トランシーバー実働研修の任意受講

- ✓ 現状分析の事前学習およびテーブルシミュレーション
- ✓ 岩手県の災害医療体制
- ✓ D 2 4 H の概要及び操作方法
- ◆ 各団体組織の活動内容など、情報交換や実践報告を聞ける場があれば、より役割の相互理解も深まると思う。連携や依頼もしやすいかもしれないと感じた。
- ◆ 車両の取り扱い。(バッテリーあがり、パンク、スタック等への対処)
- ◆ 保健医療福祉調整本部の役割については、演習後に近藤先生の講義で振り返りとして学ぶことができたが、実災害に派遣経験がないメンバーではどこの本部に入ったかで役割が変わることが想定できていない事もあると感じた。

演習前に組織図内の場所によって同じ本部でも求められる立ち回りが異なることを強調した説明をしていただけると、実践に入った時に自分たちに求められる動きはこういうことではないか?と想像しやすくなると思いました。

7. 本研修に参加して良かったこと。

- ◆ タスクの皆様、インストラクターの皆様がロジスティックをより高めていこうという熱い気持ちで実施されており、非常に実りのある内容と思います。
普段から、自施設で災害医療訓練を企画していることから、ここまでの内容を作りこむ難しさが分かることから、このような機会を頂戴したことに深く御礼を申し上げます。
- ◆ 今までの災害派遣で「本部の立ち上げ」を経験したことがなかったため、貴重な経験になりました。
衛星電話をかける練習をしたことは何度かありますが、外に設置して中に線を引き込んで使ったことはなかったもので、それも良い経験になりました。
受講者に DMAT のインストラクターがいたので、その方のノウハウを吸収することができ、また、他機関・他職種の災害対応に対する考え方も知ることができました。
DMAT が EMIS を大切にしている理由が理解できました。
どうしたら良いのかな?と迷った時、インストラクターが適度に助言してくださったため、疑問を持ち続けることなく、すぐに解消することができた。
受講の機会をいただきありがとうございました。
- ◆ 実災害を想定した外部団体との調整業務が含まれる状況付与が、さらに多く取り入れられるとありがたいですが、演習の状況付与に対応するイメージが膨らみ大変勉強になりました。
- ◆ 自分以外、みな若い人ばかりのグループでうまくやっていたか不安だったが、なんとか3日間の研修を無事終えることができたと思う
- ◆ 本部設営を実践的に行えたことで、有事の際に必要な知識の再確認と経験をすることができたこと。所属施設へ還元し、活かしていきたい。
- ◆ 改めて、ロジ力が災害時には必要であることを学んだ。また、平時でも、自部署の組織をまとめていく上でも必要な知識とスキルであり、今回参加して多くの学びを得る事ができた。
自施設で活用していきたい。

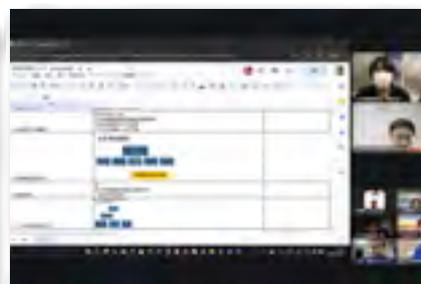
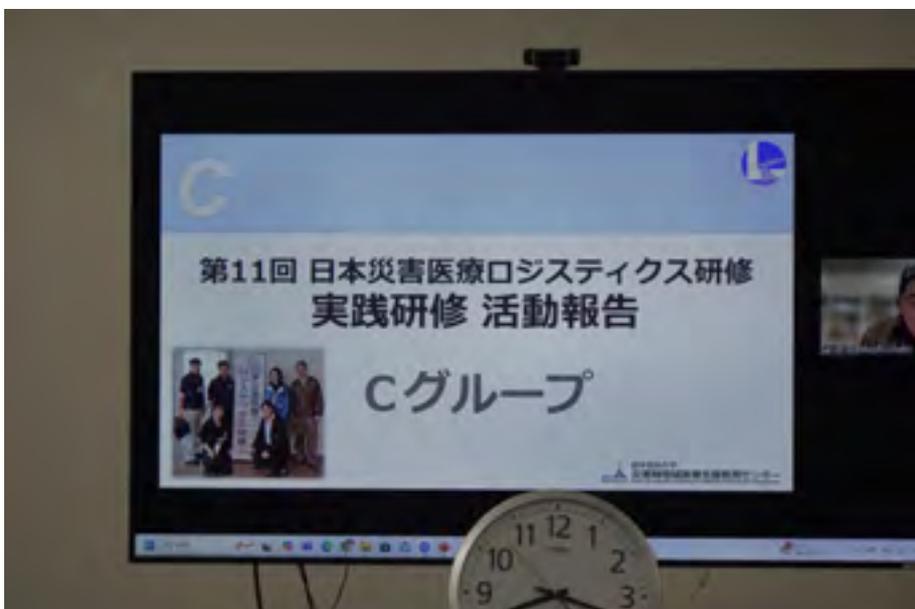
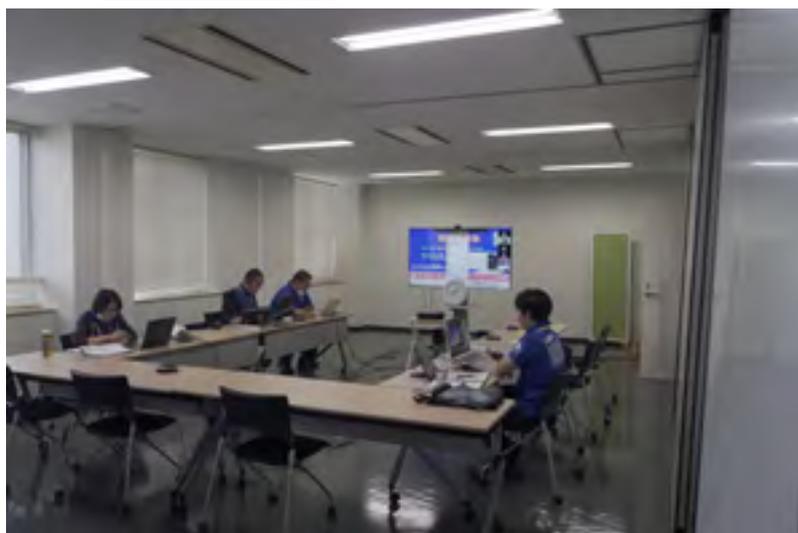
報告会の様子



今回の研修より、研修報告会をオンラインで開催する新しい試みを行いました。

実践研修2日目朝の想定終了後に、各会場をZoomでつなぎ、各グループ毎に研修の成果を発表していただきました。

若干のトラブルはありましたが、全てのグループから報告していただき、無事時間内に終了することができました。



被災地の今



受講者名簿

| 氏名 | 都道府県 | 所属機関名 | 所属部署名 | 職種 |
|----------------------|------|--------------------------|-----------------------|--------|
| あおき ひなか 青木 妃奈香 | 東京都 | 日本赤十字社医療センター | 検査部 微生物検査課 | 臨床検査技師 |
| いづか けんた 飯塚 健斗 | 東京都 | 日本赤十字社 | 事務局 救護・福祉部救護課 | 事務職 |
| おおきた しんや 大北 眞哉 | 香川県 | 四国こどもとおとなの医療センター | 脳神経外科 | 医師 |
| おおし ひろし 大橋 寛司 | 兵庫県 | 神戸市西区役所 | 玉津支所保健福祉担当 | 行政職員 |
| かない ひろま 金井 滉己 | 東京都 | 国立健康危機管理研究機構 | 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 救急救命士 |
| きくち しゆん 菊地 駿 | 東京都 | 東京都立多摩総合医療センター | 看護部 | 救急救命士 |
| こいで かおり 小出 香織 | 岩手県 | 栃内病院 | 4階病棟 | 看護師 |
| こがさか なみ 小賀坂 奈美 | 福島県 | 一般財団法人 脳神経疾患研究所附属総合南東北病院 | 救急外来 | 看護師 |
| こんどう とおる 近藤 徹 | 長崎県 | 長崎県五島振興局（五島保健所） | 保健部 | 医師 |
| さかちと たかひろ 坂本 貴弘 | 茨城県 | 日本赤十字社 茨城県支部 | 事業推進課 | 事務職 |
| ささき けいすけ 佐々木 啓介 | 東京都 | 日本赤十字社 | 事業局 救護・福祉部 防災業務課 | 事務職 |
| さとう ようすけ 佐藤 陽介 | 東京都 | 東京医科大学病院 | E Rプライマリ・ケア | 看護師 |
| さとう わたる 佐藤 航 | 栃木県 | 地方独立行政法人 新小山市民病院 | 医療技術部 | 臨床工学技士 |
| さわだ ゆうすけ 澤田 悠輔 | 群馬県 | 群馬大学医学部附属病院 | 救命救急センター | 医師 |
| さわだて ふみあき 澤舘 史晃 | 岩手県 | 岩手医科大学附属病院 | 西10B 精神神経科病棟 | 看護師 |
| すずき ひでたか 鈴木 秀鷹 | 東京都 | 日本赤十字社 武蔵野赤十字病院 | 救命救急科 | 医師 |
| たかはし しのぶ 高橋 忍 | 東京都 | 至誠会第二病院 | 栄養管理室 | 管理栄養士 |
| たかはし だいさく 高橋 大作 | 東京都 | 杏林大学医学部附属杉並病院 | 救急外来 | 看護師 |
| たかはし ふみや 高橋 郁弥 | 東京都 | 日本赤十字社 東京都支部 | 救護課 | 事務職 |
| たむら なな 田村 奈々 | 兵庫県 | 兵庫県立尼崎総合医療センター | 看護部 | 看護師 |
| ちば たかふみ 千葉 隆文 | 埼玉県 | 医療法人社団東光会 戸田中央総合病院 | I C U / H C U ・ C C U | 看護師 |
| ながた たつひろ 永田 達拓 | 広島県 | 広島大学 大学院医系科学研究科 | 公衆衛生学 | 薬剤師 |
| なかむら まさひで 中村 匡秀 | 愛媛県 | 済生会松山病院 | リハビリテーションセンター | 作業療法士 |
| にしもと しょうご 西本 章吾 | 東京都 | 社会福祉法人恩賜財団済生会 | 本部事務局 事業基盤課 | 事務職 |
| ぬたはら しゅういち 奴田原 脩一 | 山口県 | 地方独立行政法人 山口県立こころの医療センター | 地域連携室 | 作業療法士 |
| はっとり よしひさ 服部 純尚 | 埼玉県 | 国立病院機構埼玉病院 | 産婦人科 | 医師 |

| 氏名 | 都道府県 | 所属機関名 | 所属部署名 | 職種 |
|--------------------|------|---------------------------|------------------|--------|
| はら いくみ 原 郁美 | 埼玉県 | 医療法人社団武蔵野会 T M Gあさか医療センター | 看護部 | 看護師 |
| ふじた かえで 藤田 楓 | 埼玉県 | 芝浦工業大学 | D 2 4 H事務局 | 大学院生 |
| ほりえ としき 堀江 斗土輝 | 神奈川県 | 東名厚木病院 | 救急外来 | 看護師 |
| まつざき かおり 松崎 佳小里 | 福島県 | 一般財団法人太田綜合病院附属太田西ノ内病院 | 看護管理室 | 看護師 |
| まつもり たくや 松森 拓也 | 岩手県 | 盛岡市立病院 | 看護部 | 看護師 |
| みかみ けんいち 三神 憲一 | 神奈川県 | 学校法人青山学院 青山学院大学 | シビックエンゲージメントセンター | 教員 |
| みかみ ともこ 三上 智子 | 神奈川県 | 済生会横浜市東部病院 | 救命救急センター-外来 | 看護師 |
| みかみ まさゆき 三上 昌章 | 千葉県 | 千葉県総合救急災害医療センター | 検査科 | 臨床検査技師 |
| みやた ゆきえ 宮田 ゆき恵 | 山形県 | 山形県立中央病院 | 手術室 | 看護師 |
| やまくち ゆうすけ 山口 祐介 | 長崎県 | 医療法人社団英仁会 愛野ありあけ病院 | 栄養課 | 管理栄養士 |
| やまもと けんじ 山本 謙治 | 神奈川県 | 社会福祉法人鎌倉市社会福祉協議会 | 地域福祉係課生活支援係 | 事務職 |
| よしだ いおり 吉田 伊織 | 佐賀県 | やよいがおか鹿毛病院 | リハビリテーション部 | 理学療法士 |
| よしだ もとほる 吉田 元治 | 大阪府 | 大阪府立中河内救命救急センター | 検査室 | 臨床検査技師 |

運営委員・コントローラー名簿

| 役付 | 氏名 | 所属 | 職種 |
|---------|--------------------|--------------------------------|-----|
| 運営委員長 | ま せ ともひこ 眞瀬 智彦 | 岩手医科大学 | 医師 |
| 運営委員 | いちほら まさゆき 市原 正行 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 調整員 |
| 運営委員 | おおとも ひとし 大友 仁 | 公益社団法人青年海外協力協会 | 調整員 |
| 運営委員 | おくの ふみひろ 奥野 史寛 | 埼玉県済生会加須病院 | 調整員 |
| 運営委員 | おざわ かずひろ 小澤 和弘 | 愛知医科大学 | 調整員 |
| 運営委員 | こんどう ひさよし 近藤 久禎 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 医師 |
| 運営委員 | たかくわ だいすけ 高桑 大介 | | 調整員 |
| 運営委員 | なかた まさあき 中田 正明 | 兵庫県災害医療センター | 調整員 |
| 運営委員 | もりの かずま 森野 一真 | 山形県健康福祉部 | 医師 |
| 運営委員 | やまのうち さとし 山内 聡 | 仙台市立病院 | 医師 |
| 運営委員 | わかい あきのり 若井 聡智 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 医師 |
| 講師 | あかほし こうき 赤星 昂己 | 厚生労働省医政局 | 医師 |
| 講師 | くぼ たつひこ 久保 達彦 | 広島大学 | 医師 |
| コントローラー | あおき まさし 青木 正志 | 茨城県立中央病院 | 看護師 |
| コントローラー | いききだ わか 伊崎田 和歌 | 千葉県総合救急災害医療センター | 調整員 |
| コントローラー | まくた とちこ 菊田 智子 | 独立行政法人国際協力機構（JICA） | 調整員 |
| コントローラー | くぼ よしひろ 久保 芳宏 | 日本赤十字社 福島県支部 | 調整員 |
| コントローラー | しばた はやと 柴田 隼人 | 愛知医科大学 | 調整員 |
| コントローラー | たしろ まさみ 田代 雅実 | 福島県立医科大学 | 調整員 |
| コントローラー | てらさわ ゆかり 寺澤 ゆかり | 京都第一赤十字病院 | 調整員 |
| コントローラー | はだ たつや 羽田 達矢 | 独立行政法人国際協力機構（JICA） | 調整員 |
| コントローラー | はまだ まり 濱田 真里 | 兵庫県栄養士会 | 調整員 |
| コントローラー | はやし ひろかつ 林 洋克 | 済生会宇野宮病院 | 調整員 |
| コントローラー | まわたり ひろし 馬渡 博志 | 熊本大学病院 | 調整員 |
| コントローラー | みうら ゆうき 三浦 有樹 | 福島赤十字病院 | 調整員 |
| コントローラー | わたなべ あきひろ 渡邊 暁洋 | 兵庫医科大学 | 調整員 |

| 役付 | 氏名 | 所属 | 職種 |
|------|------------------------|--------------------------------|-------|
| タスク | おおつか のぶひろ 大塚 修宏 | 流山市消防本部 | 調整員 |
| タスク | おおやま りょうじ 大山 凌治 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 調整員 |
| タスク | かねこ やすなり 金子 泰也 | 長野市民病院 | 調整員 |
| タスク | きむら まこと 木村 磨功 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 調整員 |
| タスク | くらはし きみえ 倉橋 公恵 | 日本福祉大学 | 看護師 |
| タスク | さくま いよ 佐久間 惟代 | 福島赤十字病院 | 調整員 |
| タスク | しのはら いさお 篠原 功 | 山口県立こころの医療センター | 調整員 |
| タスク | しちやま きょういちろう 下山 京一郎 | 医療法人社団武蔵野会 T M Gあさか医療センター | 医師 |
| タスク | たかはし たかゆき 高橋 貴行 | 永生病院 | 調整員 |
| タスク | たちばな たけし 橋 岳志 | 大阪府済生会千里病院 | 調整員 |
| タスク | たの はた りな 田之畑 季菜 | 宮崎大学医学部附属病院 | 調整員 |
| タスク | はらこ あゆむ 腹子 歩夢 | 一般財団法人 脳神経疾患研究所附属総合南東北病院 | 調整員 |
| タスク | 藤井 貴文 | 北見赤十字病院 | 調整員 |
| タスク | ますどめ るき 増留 流輝 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 調整員 |
| タスク | みうら けいいち 見浦 継一 | 国立健康危機管理研究機構 危機管理・運営局 DMAT 事務局 | 調整員 |
| 運営委員 | ふじわら ひろゆき 藤原 弘之 | 岩手医科大学 | 調整員 |
| 運営委員 | とみなが あや 富永 綾 | 岩手医科大学 | 調整員 |
| 運営委員 | かねこ たく 金子 拓 | 岩手医科大学 | 調整員 |
| スタッフ | さわだ こうじ 澤田 幸司 | 岩手医科大学 | 運営事務局 |
| スタッフ | たくち よしひさ 田口 善久 | 岩手医科大学 | 運営事務局 |
| スタッフ | がまさわ まさる 浦澤 優 | 岩手医科大学 | 運営事務局 |
| スタッフ | いとう ゆかこ 伊藤 友香子 | 岩手医科大学 | 運営事務局 |
| スタッフ | さとう ひとみ 佐藤 仁美 | 岩手医科大学 | 運営事務局 |

協力団体・組織

- 総務省東北総合通信局
- 宮古市役所
- 釜石市役所
- 大槌町役場
- 宮古保健所
- 釜石保健所
- 岩手県立大槌高等学校
- 岩手県立宮古病院

協賛企業

- エアーストレッチャー株式会社
- 尾西食品株式会社
- 株式会社大塚製薬工場
- 小津産業株式会社
- 株式会社サムライコネクション
- 株式会社セイエンタプライズ
- 株式会社ドコモビジネスソリューションズ
- 株式会社ノルメカエイシア
- 株式会社長谷川綿行
- 株式会社モレーンコーポレーション
- 株式会社ワコー商事
- 共立医科器械株式会社
- K D D I 株式会社
- 杉田エース株式会社
- セブンシップサービス株式会社
- ソフトバンク株式会社
- テクノホライゾン株式会社
- 日本製紙クレシア株式会社
- 日本セイフティー株式会社
- 北良株式会社
- ミドリ安全岩手株式会社
- M I R A I - L A B O 株式会社
- メンリッケヘルスケア株式会社
- ランドポート株式会社

(50 音順)



第11回 日本災害医療ロジスティクス研修報告書

発行日 : 2026年3月16日(月)

編集/著者 : 岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター

発行所 : 岩手医科大学

〒028-3694

岩手県紫波郡矢巾町医大通一丁目1番1号

Tel. 019-651-5111 (代表)

連絡先 : 岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター

〒028-3694

岩手県紫波郡矢巾町医大通一丁目1番1号

Tel. 019-651-5110 (内線 5576)

e-Mail Add. saigai@j.iwate-med.ac.jp

ISBN978-4-906713-18-9

※無断転載を禁じます



岩手医科大学

災害時地域医療支援教育センター

Center for research and training on community health services during disaster

日本災害医療ロジスティクス研修運営事務局

〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町医大通一丁目1番1号

Tel. 019-651-5110 (内線 5576)

URL. <https://www.iwate-med.ac.jp/saigai/>

e-Mail Add. saigai@j.iwate-med.ac.jp